

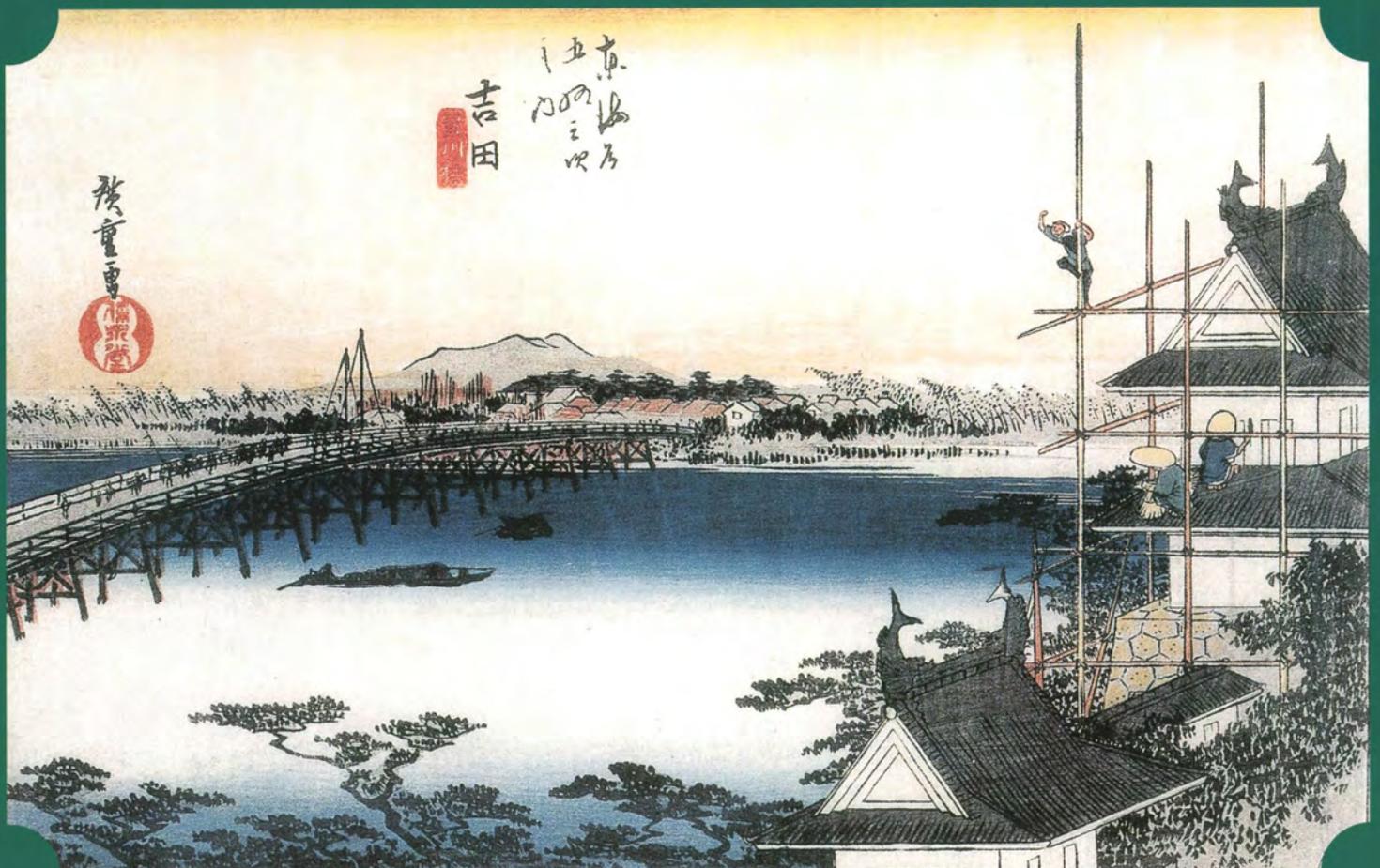
校区のあゆみ

下地

豊橋校区史

48

Shimoji







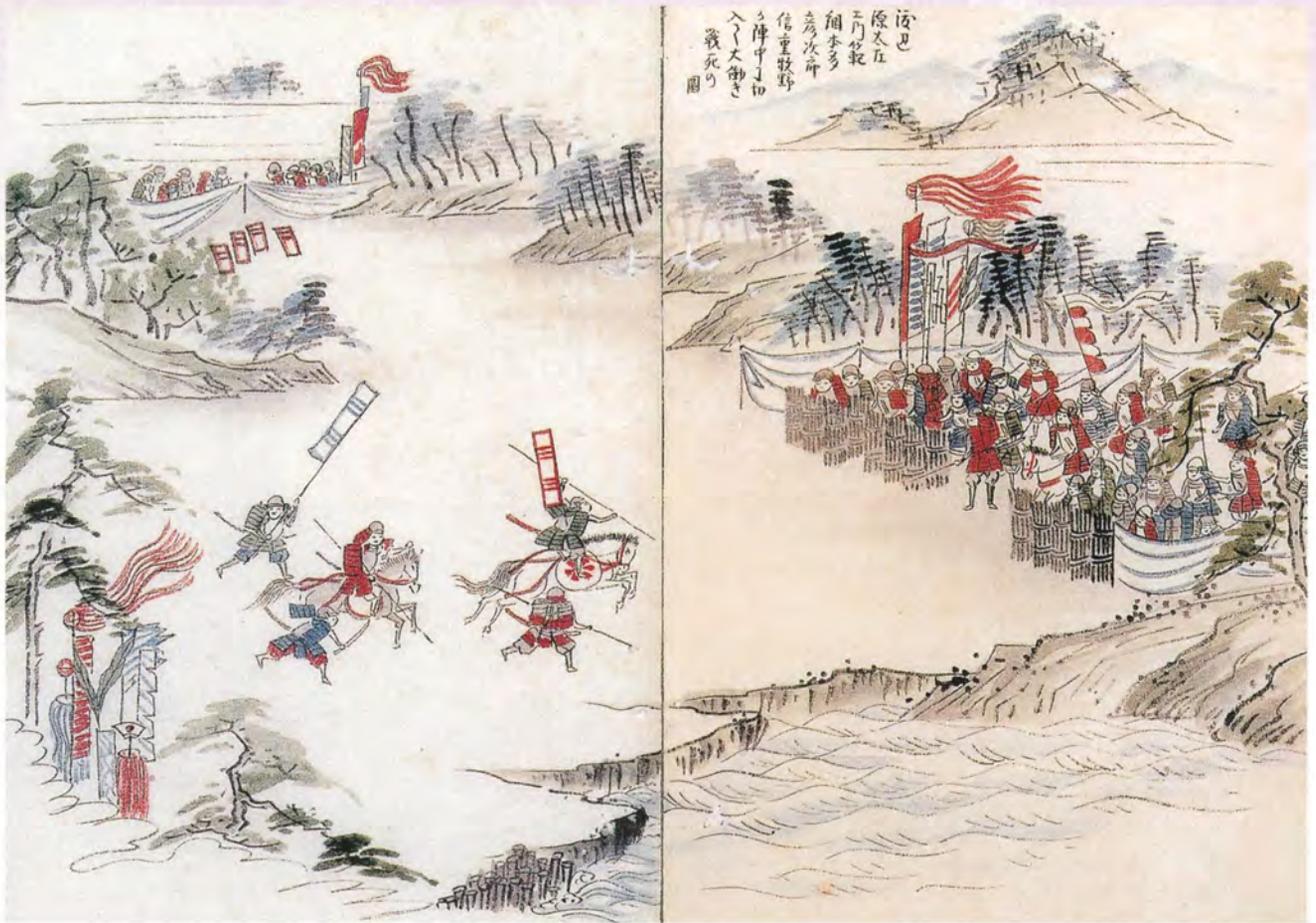
写真撮影：小林春吉氏

豊橋市制施行100周年記念

校区のあゆみ 下地



下地小学校6年生による豊川横断の様子



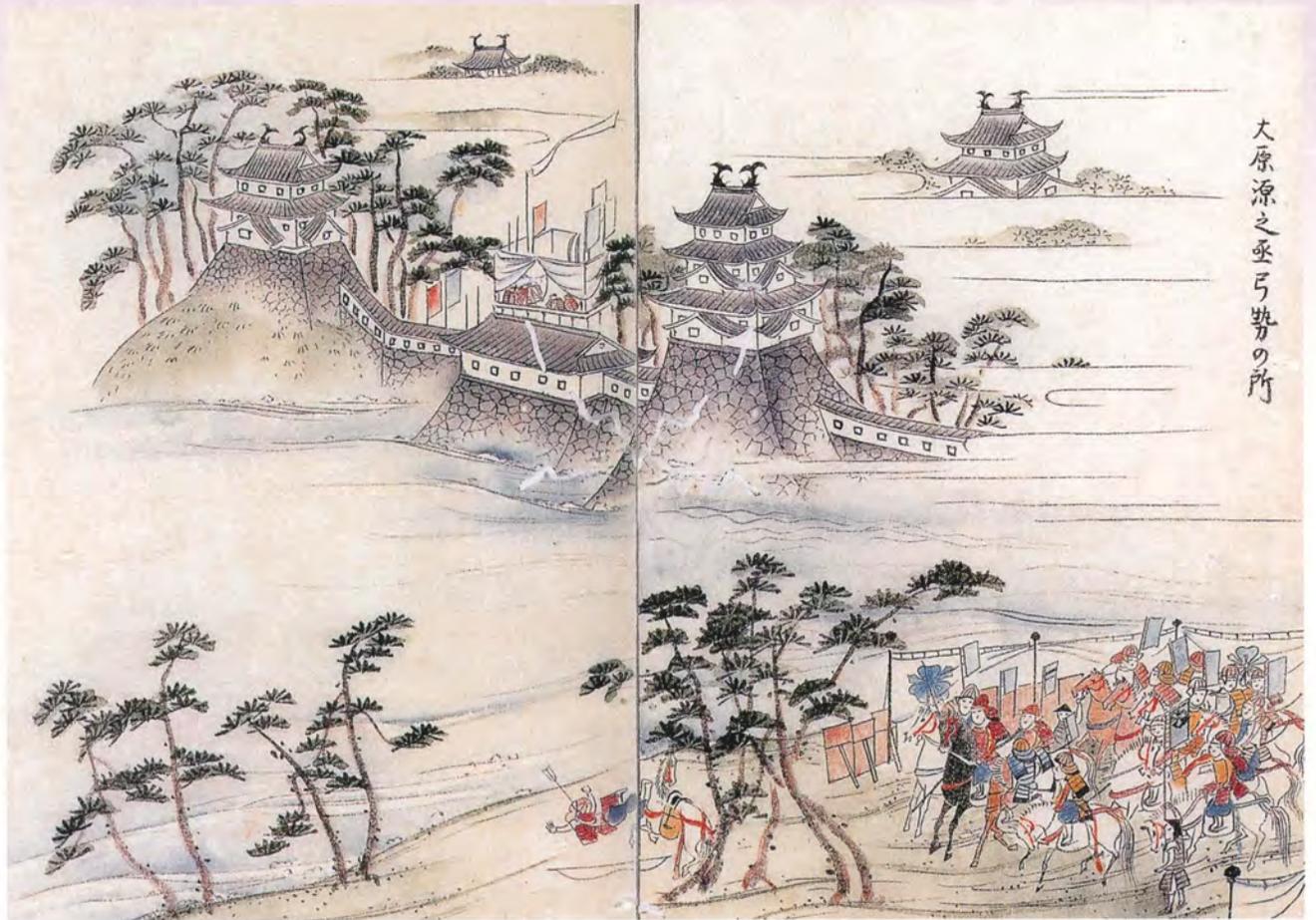
下地合戦 (吉田名蹤綜録より)



東海道五拾三次 吉田 (狂歌入)

天保年間後期

歌川広重



大原源之丞弓勢の所

下地合戦 (吉田名蹤綜録より)



東海道
吉田驛
豊川之
長橋

源頼朝公
京都より下向之圖

遠別屋彦次郎
繪

源頼朝公京都より下向の圖

東海道吉田驛豊川之長橋 文久3年 (1863) 二代歌川広重



環境美化の下地っ子



竹もらい

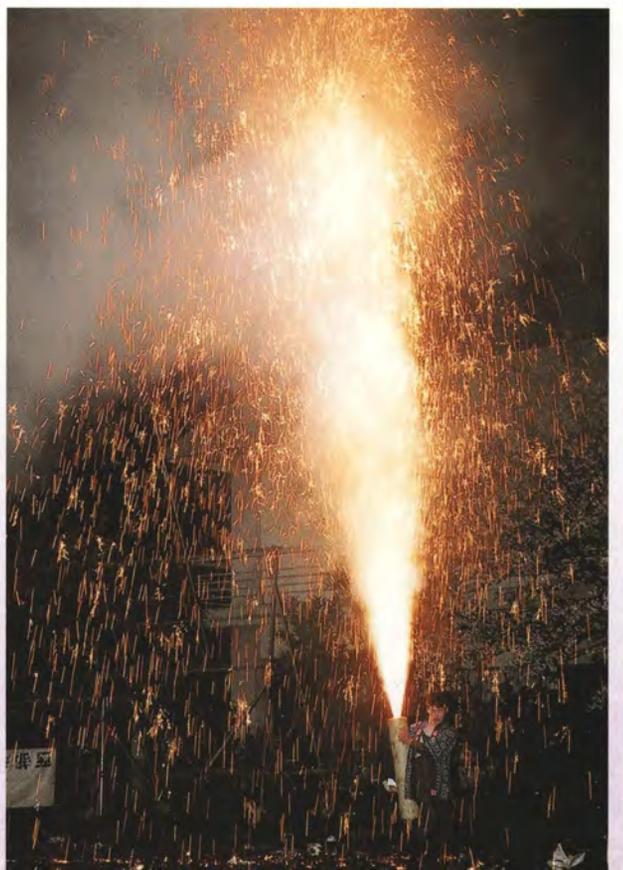


豊麻神社例大祭

豊麻神社手筒花火奉納



とよはし100祭 下地納涼夏まつり



発刊によせて



平成18年度
豊橋市総代会長

西 義 雄

このたび、豊橋市制施行100周年を記念し、「豊橋校区史～校区のあゆみ」を発刊する運びとなりました。皆様のご協力により記念事業に素晴らしい彩りを添えることができましたことを、心よりうれしく思います。

この事業は、100年の節目を契機に地域の歴史や文化、自然などを改めて見つめ直し、将来の夢に思いを馳せていただくものであり、51校区すべてが足並みを揃え発刊できたことに、たいへん大きな意義を感じています。また、各校区におきましては、編集委員を中心に多くの地域住民の皆さんが資料の収集や原稿の執筆などに携わられたことと思います。こうした取組みを通し、地域の絆がさらに深まったものと考えています。

地域イベントの開催を含め「市民が主役」を合言葉に行政と協働で進めてきた100周年記念事業ですが、多くの地域住民の方々が様々な形で挙って参加できたことが何よりの成果であったと思います。今後におきましても、この100周年記念事業を一過性のものに終わらせるのではなく、次の100年に繋げていかなければならないと考えています。

最後に、本校区史の発刊にあたり、多大なご協力を頂いた多くの皆様に改めてお礼を申し上げ、ごあいさつとさせていただきます。



平成18年度
下地校区総代会長

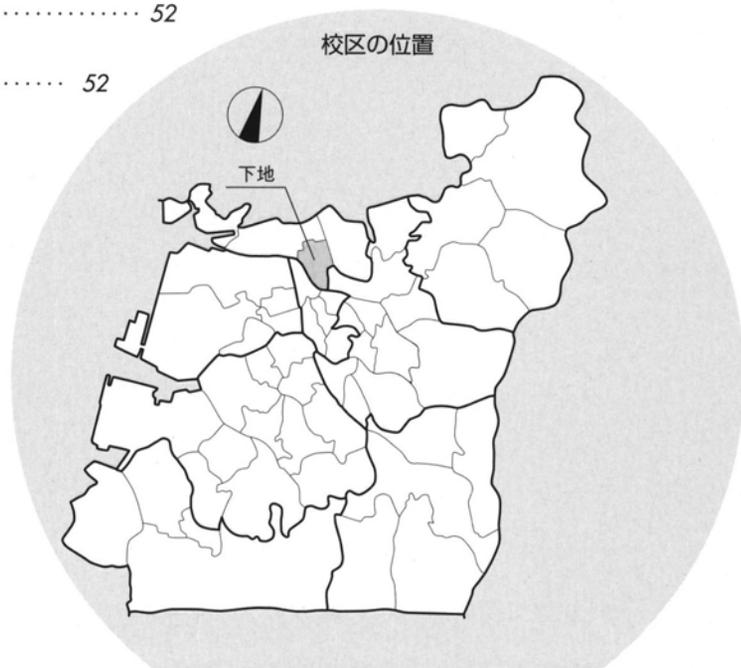
鈴木 昌一郎

豊橋市制施行100周年記念事業として、市内51校区が「校区のあゆみ」を発刊することになり、下地校区は「校区のあゆみ 下地」の題目のもと、第1章“自然と環境”第2章“歴史と生活”第3章“教育と文化”の三面をそれぞれ数人の編集委員と、市より指名を受けた二人のサポーターの協力により編集作業を進めて参りました。広範囲な資料の調査及び収集並びに編集諸氏の貴重な体験などを織り交ぜ、歴史上の出来事、思い出話、環境の変化、現在の活動など限られた頁数ですが幅広く取り込めた校区史であると思います。

この校区史をご覧いただくと、下地校区の生い立ちからはじまり、清流豊川とよがわの自然のめぐみと洪水の歴史、下地合戦に見られる戦国模様、交通の要所としての下地の様子や、明治6年（1873）から永い歴史を持つ小学校教育や幅広い文化活動など地域一体となつての取り組みを知って貰えると思います。この貴重な資産を、次代を担う人達に伝授し、地域の皆さんの“心”のつながりを深め、より良い下地、より良い豊橋として発展することを祈念申し上げて「発刊によせる」ことばいたします。

第1章 自然と環境	1 下地の生い立ち	7
	2 田園地帯の変遷	8
	3 豊川の自然	9
	4 下地の環境	11
第2章 歴史と生活	1 古代の下地	14
	2 中世の下地	15
	3 戦国時代の下地	17
	4 江戸時代の下地	18
	5 近代の下地	24
	6 現代の下地	28
	7 未来への遺産とメッセージ	34
第3章 教育と文化	1 学校教育	35
	2 社会教育	38
	3 社寺	42
	4 史跡	44
	5 伝説	45
資料編		46
下地校区年表		48
参考文献		52
編集後記		52

校区の位置



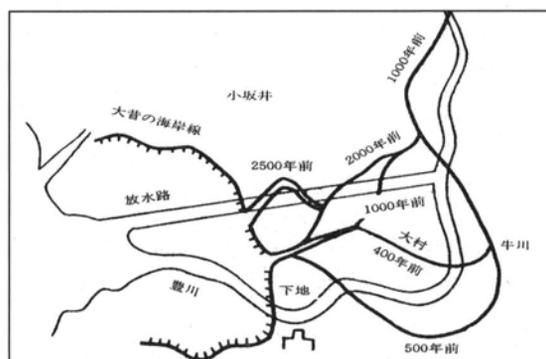
第1章 自然と環境

1 下地の生い立ち

(1) 土地の形成

大昔の縄文時代には、下地の土地は三河湾が深く入り込んだ海であった。北の海岸線は小坂井から牛久保の高台あたりで、南の海岸線は飽海町から牟呂町に至る高台あたりであったと思われる。そこには貝塚等があり人が生活していた証拠がある。下地小学校の増築工事でのボーリングでアサリやカキの貝殻が発見され、海であったことを示している。

豊川の流れは、図に示すような変遷をたどったと考えられ、上流より流された土砂が堆積して陸地（自然堤防）が造られてきた。



豊川の推移（推測）

まず縄文後期には五貫森遺跡等のある大賀里付近に人が住みつき、さらに弥生中期には瓜郷遺跡や緑遺跡（下地町1丁目付近）のある周辺に集落ができ稲作等の農耕生活が始まった。しかし、その後洪水に遭い集落は消滅したものと思われ、各遺跡がそれを示している。

その後下地付近は、平安時代後期頃に、陸地化した土地に集落ができ農耕生活が始まった。鎌倉時代になると東海道（渡津の今道）

が整備され旅人が多く通るようになったと言われており、下地の元ができたと考えられる。



創世記が偲ばれる金色島風景

(2) 下地の自然環境

沖積低地の下地は、度々洪水の自然災害に襲われたが、洪水が農地形成の源でもあった。豊川によってつくられた肥沃な土地は、水田として稲作に適したため、前記のように平安時代後期頃から下地開発7人衆と言われている人が住み始め、順次開墾され田園地帯が形成されていった。水田や畑には、多くの動物や植物が共存しており、自然の恵みを受けながら村が発展してきた。

また、下地は豊川の自然の恩恵も大きかった。豊川の下流域にあり、境界線の約半分の2.8km（河口から4.5～7.3km地点）が豊川に面している。そして、河口から約12kmに及ぶ潮の干満域にあるため海水が混ざり、川魚と海魚が同居する環境にある。そして、豊川は幅が広く水深があるため、水運に利用されてきた。特に水運は、明治以後の下地の産業発展への寄与が大きかった。

豊川は、水運を使った産業だけでなく、洗濯、水泳、魚捕りなど生活と切っても切れない関係にあった。今でも、都心近くで魚釣りやシジミ捕りができる自然に恵まれている。

2. 田園地帯の変遷

(1) 下地の土地利用

土地利用は、明治23年（1890）には次のようであった。〔宝飯郡誌（明治26年発行）〕

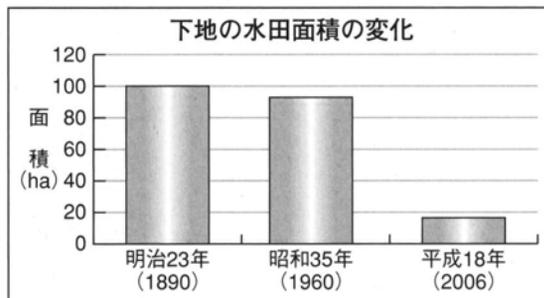
地目	面積		比率
郡村宅地	12町4反2畝	(ha) 12.42	(%) 8.3
水田	99町3反4畝	99.34	66.5
畑	35町9反2畝	35.92	24.0
山林	1町1反4畝	1.14	0.8
原野	6反2畝	0.62	0.4
合計	149町4反5畝	149.45	100.0

注) 1町≒1ha(ヘクタール)、四ツ屋は含まない。

下地の土地は、明治時代には既に99%近くが利用されており、自然環境は、田畑そのものにあつたといえる。特に、土地の三分の二が水田で、江戸時代以前（1567年頃）より松原用水による恩恵を受けてきた証拠である。さらに、毎年のように起こった田畑の冠水も、上流から肥料分の供給としての利点があつた。

(2) 水田面積の変化

現在では、水田面積は図で示すように激減しており、田園風景はわずかに残るだけとなり、住宅・商業・工業・道路の面積が多くを占めている。



(3) 農地の自然環境変化

① 戦前から昭和30年頃までの情景

下地は旧東海道と旧豊川街道に沿った家並みを外れると一面に水田が広がり、遠くに豊

川稲荷本殿の屋根や飯田線の電車が見えた。

水田は二毛作地が多く、四季折々、自然の風情を与えてくれた。春には麦の緑、菜の花の黄色、レンゲの花の赤紫がモザイク状に一面に広がり素晴らしい景色を見せた。また、ヒバリのさえずりが聞こえた。晩春には、麦や菜種の殻を焼く煙が一面にただよい、まさに唱歌“おぼろ月夜”の世界であつた。

初夏には、松原用水のおかげで田植えが一斉に始まった。一面に青々とした水田が広がり、用水には^{よつであみ}四手網や竹みを持った子どもたちがフナやドジョウを追う姿があつた。

秋には、一面に黄金色をした稲穂が波打ち、また、大人に混じりイナゴを捕る小学生の子どもたちの姿も見られた。

冬には、稲刈りが済んだ休耕田が子どもたちの良い遊び場で、野球をする姿も見られた。

また、中学校には、田植え時と稲刈り時に、^{のうはん}農繁休暇制度（昭和32年頃まで）があつた。

② 耕地整理による自然への影響

昭和8年から始まった耕地整理は、一次と二次に分け昭和30年（1955）に完了した。田畑は長方形に区画され、用水路も整備されて農業基盤が改善された。工事中に生物に与えた影響は、時間と共に元に戻ってきていた。

③ 強力な農薬「パラチオン」使用の影響

用水路や田畑には多くの生物がいたが、昭和30年頃から強力な農薬「パラチオン」の一斉散布が始まり、それを契機に、生物の生存環境に重大な影響を与えた。農薬によって短期間での絶滅や、大幅な減少をもたらした。例えば、平家蛭、メダカ、カエル、オタマジャクシ、ザリガニ、ナマズ、イタチ、ヘビ、ヒバリ、トンビ、タニシ、イナゴ、バッタ、ヤゴ、ミズスマシ等である。

また、農薬散布で用水路での魚捕りや水泳が制限され、子どもたちの遊び場が失われた。

④ 国道整備と農地の商業・工業用地化

昭和30年頃から豊川街道（旧国道151号線）の整備、昭和34年（1959）の国道1号線の西八町・瀬上間の開通、さらに昭和37年（1962）に国道1号線の瀬上・国府間の開通で、両街道沿いでは商業用地化、工業用地化及び宅地化が進んだ。そのため用水の汚れ、排気ガスの増加などで、のどかな田畑風景は失われ、動植物の生態系は大きく変化した。



田園風景（1965年、豊飯通4,5丁目）

⑤ 外来植物の進入

昭和40年代以後になると、背高あわだちそう、西洋たんぼぼ、等が見られるようになり、在来種を圧倒する繁殖をしている。

3. 豊川の自然

(1) 豊川の堤防にあった大木

大昔より度々の洪水に襲われた豊川流域は、その護堤のためか、また祈りか鎮魂か、堤防の所々に大木や桜並木があり、自然景観を保っていた。しかし、吉田大橋の架橋、昭和41年（1966）から上流部の堤防工事と護岸工事、及び昭和47年（1972）から下流部の護岸工事により、大木のほとんどが姿を消し、一部が金色島周辺に残るだけとなった。

① 水神堤の松林

安政2年（1855）、水神堤（北村～横山付近）が86m決壊と「郷土誌下地」に書かれている。この時の護岸改修時に20数本松の苗が植えられた。しかし、昭和41年からの堤防工事で伐

採されたが、伐採時には樹齢が110年あまりで直径50～60cmの大木であった。

② 一本杉

水神碑のあった堤防の約200m下流に一本杉と呼ばれた大木があった。直径が1mあまりの堂々たる姿は、下地のシンボルであった。

戦時中の落雷により半分が枯れ、その後次第に枯れが進んで完全に枯れたために、昭和41年からの護岸工事でその姿を消した。



一本杉（戦前、朝倉川河口より）

③ 乾の樺

県指定の天然記念物で樹齢600年、直径1.6mの巨木“乾の樺”があった。しかし、吉田大橋の工事のために昭和33年（1958）に伐採された。

④ 榎木の太木

堤防の所々に榎木の太木があった。夏には涼しい木陰を人々に与え、豊川の自然風景をかもし出していた。特に、四ツ屋の外れの川岸には直径1mあまりの大木がそびえていたが、戦時中に伐採された。

⑤ 金色島周辺の緑

金色島一帯は、自然環境と景観保全のため



金色島全景（2003年頃）

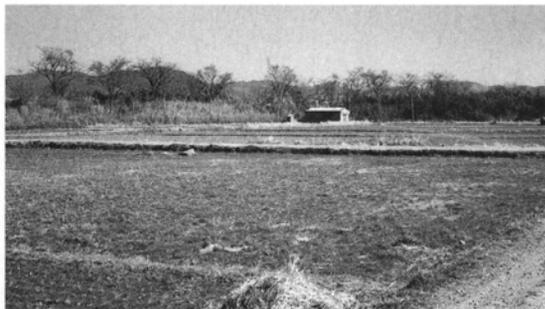
に10数本の大木が残されている。

遊歩道、階段状に作られた川岸、運動広場、ゲートボール場などが整備されている。対岸に吉田城が見える好立地で、市役所の展望室から眼下に見える公園でもある。豊橋のシンボルとして市民が利用できる親水公園となるように、さらに一段の整備が望まれる。

⑥豊川堤の桜

おおいり
大塚、城向、及び四ツ屋から下地駅下流の堤防には桜並木があった。

春には美しい花の風景を、夏には涼しい緑の木蔭を人々に与えてくれたが、昭和40年代に行われた堤防・護岸工事ですべて伐採され寂しい限りである。



大塚の桜並木 (1965年)

(2) 豊川の自然利用

①水運業

豊川は、水量が豊富で、水深も深く、河口から約12kmまで潮の干満があるため、昔から水運に利用されてきた。しかし、第2次世界大戦前後からの鉄道やトラックへの輸送切り替えによって水運は衰退していった。

②製材業

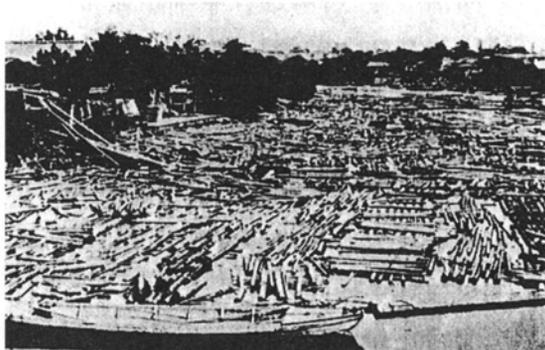
その昔、三河山地の木材が豊川を利用し筏いかだにして運ばれたため、豊橋の製材業者の多くが下地にあって、加工した材木は県内を始め各地へ送られた。

その後、豊川上流からの筏での運搬が少なくなるに従い、木材は各地から船で豊川の河口に運ばれ、そこで筏に組み、満ち潮に乗っ

て下地へ運ばれた。

昭和35年頃の最盛期には豊川の三分の一が製材を待つ木材で埋められるほどであった。

さらに、トラックや鉄道輸送が主流になるに従い、下地の製材業者は次第に減少した。昭和47年からの豊川護岸工事のために貯木場が廃止になり、ほとんどの業者が廃業した。



貯木場と川岸の緑

③豊川でのレジャー

豊川は水量が多く、水が清く、満ち潮には海水が入るため、真水と海水の両方の魚貝類が生息している。ハゼ、ボラ、セイゴ、タイ、フナ、コイ、ウナギ、シジミなどが捕れたし、今でも、増減はあるが上記の魚介類がいる。

昭和34年(1959)に小学校の水泳プールが完成したことで、豊川での水泳が禁止されるまでは、豊川での水泳や川遊びが盛んだった。豊川は子どもたちの楽しい遊び場であり、一日中、子どもの楽しい声はずが弾んでいた。特に、上級生が下級生の面倒をみてきたため、下地の子どもの水難事故はほとんど無かった。

また、昭和30年代(一部40年代)まで、城下、湊町、船町、下地駅付近には貸船店があり、和



ボートと一本杉 (1965年頃)

船やボート遊びなどで大いに賑わった。

当時は、前芝や吉前海岸での潮干狩りが盛んで、大潮の前後には客を乗せた漁船や手漕ぎの和船で川を下って行く姿が見られた。

また、四ツ屋の河岸に旧制中学時代の「豊橋中学校の艇庫」があって、競技用ボートを使った練習風景が見られた。

④豊川を利用した軍事訓練

豊川は水深が深く、川幅も広いことを利用した軍事訓練に使われた。戦前、向山（現在の豊橋商業高等学校）には陸軍の工兵部隊があって、金色島の対岸には工兵部隊の基地があり、鉄舟等の各種機材が置かれ、豊川が工兵部隊の水上訓練の場として使われた。

数隻の鉄舟で操船訓練が行われていたが、重い鉄舟を櫓で漕ぐ訓練や、厳しい真冬の豊川に浸かっての訓練は大変にみえた。

特に、四ツ屋の河岸から対岸まで鉄舟を並べ、その上に板を敷いて作った鉄舟橋は見事であった。地元の子どもや大人が驚きをもって渡ったことが今でも思い出される。

4. 下地の環境

(1) 交通環境の要所

①東海道^(*)と下地

下地には鎌倉時代以前より東海道が通っており、京都と江戸を結ぶ最も大切な街道であった。英傑の秀吉や家康、参勤交代の大名行列、俳聖の芭蕉、多くのお伊勢参りの庶民、幕末の志士、そして、江戸へ下向された明治天皇も東海道を通られたのである。

*1) 東海道の名称について

現在、「東海道」という公式の道路はない。現県道白鳥豊橋線は、江戸時代初期から「東海道」の名称で親しまれてきたので、この道路を「旧東海道」と記すことにした。市内で「東海道」と表示のある道は江戸時代の道路位置を示している。

なお、安土桃山時代以前の道路（場所は不明）を含めた道路の総称を「東海道」と記した。



旧東海道沿いにある一里塚（下地町4丁目）

②豊川街道（現県道400号線）

豊橋・豊川間は“稲荷せこ^(*)”を起点とする狭い旧豊川街道しかなかったため、バイパスの新道が豊橋から直進するように昭和15年（1940）に造られた。片側二車線で歩道付の広い道路であったが、道路一面には、こぶし大の石を含む砂利石が敷き詰められていた。そのため通行は困難であり、ほとんどの人が旧道を通っていた。また、戦中・戦後の食料不足の時には、歩道に小学校の児童や住民がさつま芋、大豆等を植えていた。

昭和40年（1965）の豊川放水路完成を契機に、車道と歩道の整備が進み現在の姿になった。後に、国道151号線バイパスができ、豊川・新城への道路として重要さが増している。

*2) 「稲荷せこ」の説明は第3章の史跡を参照のこと。

③旧東海道（現県道白鳥豊橋線）

江戸時代から旧東海道が下地を通っていた。戦前は、町内で製材業が盛んであった。製材された材木の輸送は牛車や馬車が中心であったが、1～2匹の犬の力をかりた人力の荷車も見られた。たまにオート三輪車や自動車も走っているのが見られた。

戦中・戦後のガソリン不足のときは、木炭車（木炭から発生するガスが燃料の車）が走っており、発車準備に白煙をあげる風景がしばしば見られた。また、旧東海道は未舗装で歩道は無く、砂塵と牛糞や馬糞にさらされ、特に雨の日は大変であった。その後、トラック輸

送の増加に伴い車も大型化し四ツ屋の狭い道路では、すれ違いでいさかいが度々あった。

戦災復興事業で、下地町2～5丁目の道路は整備されたが、6丁目は未整備である。



旧東海道の四ツ屋通り

④国道1号線

昭和30年代になると、経済発展に伴いトラックによる物流が増大し、道路の整備が急務となった。現在の国道1号線は、昭和34年(1959)に吉田大橋の完成に併せて瀬上までの道路が開通し、昭和37年3月に国府まで開通して、日本の動脈となった。

開通以後の国道1号線沿いには、各所にドライブインが開業したが、昭和44年に東名高速道路が開通したことで、次第にその姿を消していった。



小学校横の歩道橋から瀬上交差点方向

(2) 洪水・浸水対策

①^{かすみてい}霞堤閉め切りの効果

下地は、自然の恵みも多かったが、低地のため、昔から洪水等の自然災害に苦しめられ

てきた。その対策として豊川放水路の完成(昭和40年)、大村霞堤の閉め切り(昭和41年)、さらに、豊川堤防の改修で、堤防の決壊による洪水の心配は少なくなった。

上記により、毎年あった大雨毎の農地や道路の冠水は少なくなったが、下地全体が低地で水はけが悪いため、台風等の大雨時には家屋への浸水や、道路の冠水による被害の発生はなくならなかった。



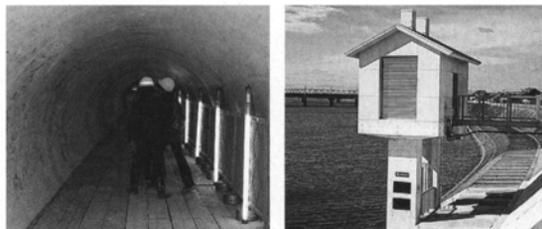
瀬上交差点の浸水(1974年)

②下地ポンプ場による雨水排水対策

大雨時の浸水対策として、昭和59年(1984)から2年で雨水排水ポンプを3箇所に設置したが十分ではなかった。更なる排水能力の向上のため、平成5年(1993)から雨水集水用暗渠の工事に着手し、平成13年(2001)に暗渠の幹線が完成した。同工事に並行して、四



(集水暗渠) ↑ (ポンプ場) ↓ (排水塔)



雨水排水ポンプ場

ツ屋地区に下地ポンプ場の建設工事が行われた。

平成16年（2004）に建物と1号機ポンプ（毎分284m³排水）の設置が完了し、平成17年4月に稼動した。2号機ポンプ（毎分141m³排水）は平成18年4月に稼動した。

さらに、ポンプ2機の設置が予定されており、これらのポンプがすべて完成すると毎分約1,000m³の排水能力（1分間に25m水泳プール2杯分以上の排水）が見込まれ、浸水による被害の心配が少なくなると予想される。

この大工事に感謝し、素晴らしい住みよい下地を作ることを改めて心がけたい。

(3) 職業の変化

第2次世界大戦での空襲で下地町1～5丁目と旧豊川街道沿いの大部分が焼失したため、校区全体の戦前を知る資料はなかった。

ところが、四ツ屋地区は戦災の被害がなく戦前の町並みが残っており、下表のように職業の変化を知ることができた。戦前は会社又は個人営業の製造業や商店の経済活動が盛んで、病院以外はほとんど用が足りたが、現在は家業を引継いでいる人が少なくなっている。

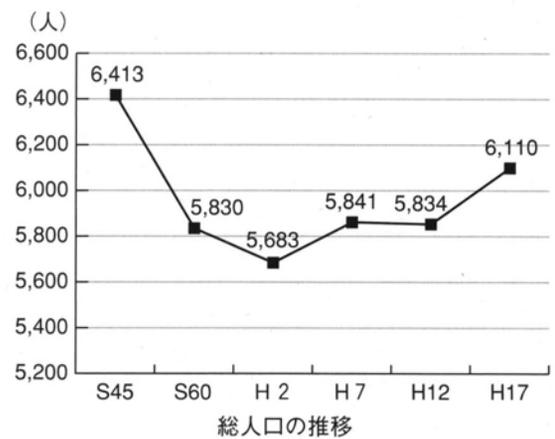
四ツ屋地区の職業の変化

区分	業種	件数		区分	業種	件数	
		S12	H17			S12	H17
製 造 業	酒造	1	0	小 売 業	料理・旅館	2	1
	樽製造	1	0		酒 店	1	0
	建具製造	5	3		菓子店・駄菓子店	4	0
	木工玩具	1	0		衣料店	1	0
	畳製造	1	0		たばこ店	2	1
	船大工	1	0		自転車店	1	0
	大工	8	2		薬 局	2	0
	左官	1	1		金物・瀬戸物・雑貨	4	1
	生糸採糸	1	0		農機具店	1	0
	籠製造	1	0		銭 湯	1	0
卸 業	提 灯	1	1	他	理 髪 店	1	0
	穀物・油御	1	1		養鶏・養豚	3	0
	練炭卸	1	0		珠算塾	1	0
	のり加工卸	0	1		鋸目立て	1	0
小 売 業	みかん卸	1	0	新聞店	1	0	
	米穀店	2	1	倉庫業	0	1	
	食品(魚・塩・肉)	4	0				
合				計		57	14

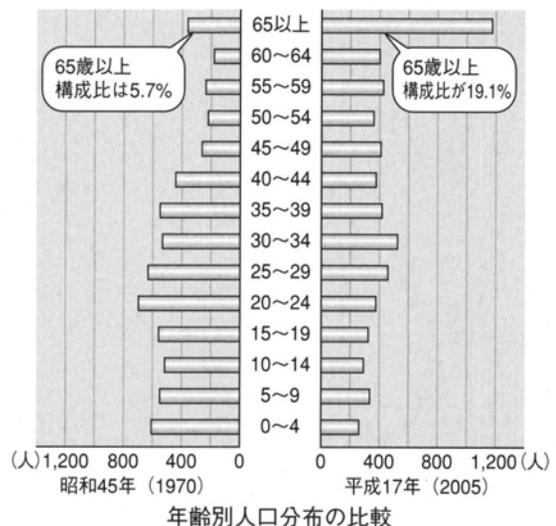
(4) 下地町の人口推移

人口の推移は、自然や社会の環境に大きな影響を与える。わが国は人口の少子化、高齢化が急速に進み、平成17年には予想より早く人口の減少が始まったと報道された。

国はもとより市町村にとって、人口減少は社会環境面にも影響がでる重大な問題である。下地町の人口の推移を次に示す。図は昭和45年（1970）と昭和60年（1985）から5年毎の人口である。平成2年（1990）までは漸減であったが、以後漸増になっている。



次に、昭和45年（1970）と平成17年（2005）の年齢別の人口分布を示す。45歳以上が増加し、20歳以下が半減しており、下地も高齢化が進んでいることが分かる。高齢化による社会環境への影響が懸念される。



第2章 歴史と生活

1 古代の下地

(1) 下地のカオス

歴史は文字に記録されて始まるという。校区の基盤である下地村は一体いつから記録に現れ、つまり歴史に登場してきたのか。現在下地校区が存在する大地は、豊川下流域の沖積低地にある。ここで、後氷期の地球温暖化という環境の変化に対応して、三河山地の森林資源と三河湾の海洋資源が出会い縄文文化が展開した。

そして新たに稲作文化という平野資源を手に入れたわれわれの先人たちは、豊川河口付近の低地に集落を営み、農耕、漁獲、交易などに従事した。この集落、下地が歴史に登場するのは、はるか後のことである。

(2) 水底の下地

私たちの下地は、大化の改新（645年）のころまでには、豊川河口一帯に広がる宝飫（ほお）郡渡津郷の一部であったと思われる。

古くは縄文海進時代（第4紀沖積世一約6000年前）、約3m海面が上昇し、沿岸部には大蚊（賀）里・五貫森貝塚を残してくれた。これら貝塚の前面に位置した下地校区はそのほとんどが水底にあった可能性がある。つまり、そのころわが校区は大地として存在しなかったといえる。

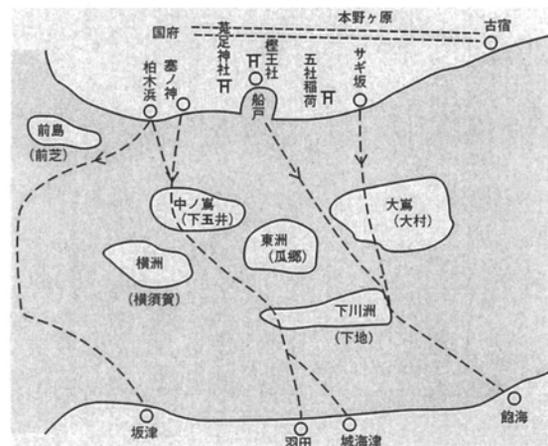
その後海面は徐々に低下し、海岸線も後退し豊川の沖積平野が広がった。そして弥生時代には、瓜郷遺跡や緑遺跡などから、下地が大地として姿を現していたと思われる。両遺

跡の出土品から先人の開拓の跡を知ることができる。

(3) 下地の開拓者

下地村を含む豊川河口一帯の沖積低地を開拓したものは何者か。大陸からの第2波の渡来者は弥生文化の担い手であるとされる。近隣の海辺や川筋に残る飽海、渥美、横須賀、白須賀などの古地名も一つの手がかりを与えてくれる。地名をして語らしめることに耳を傾けてみたい。

平安時代の「飽海の渡し（後に、志香須賀の渡し）」についても、数々の考察（新訂宝飯郡誌、他）がある。しかし、その位置は不明である（この渡しの沖合に下地は位置するので、下地を探す定点として使えず、平安時代以前は、いまだ下地はカオス（混沌）の中にある。



志香須賀の渡しの想定図（原図：中西正氏）

東三河の歴史を語るとき、中世の旅行記・日記文が引用される。しかし、直接下地に言及しているものはない。たとえば下地は「渡

しの通り道であり」と言ったあいまいな表現となり、下地村への通り道と誤解されやすい。通り道なら村ですらない。

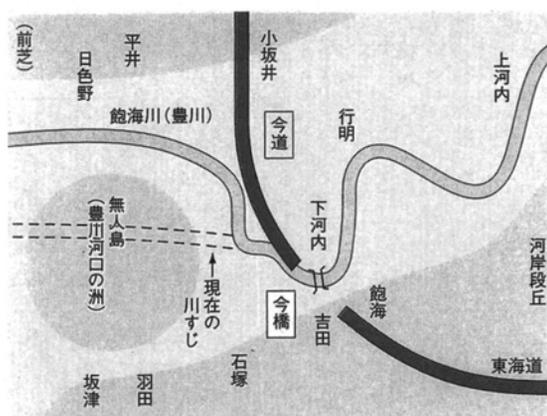
(4) 下河地、下河内から下地へ

地名としての「下地」を探索すると下河地(下河内)、下河洲の古地名に遭遇する。

室町時代の応永年代に、「下河地」を「下地」に改名したとの記録があるが、そのいわれははっきりしない。豊川上流域の上河内に対する下河地(下河内)が下地に転じたのであろうか。下河地の真ん中の「河」が抜け落ちて下地となったとは考えにくい。

下地の「下」は豊川左岸丘陵部の高地集落の「上」に対するものであったのか、豊川上流に対する下流を意味したのかは不明である。しかし、下地住民が長く宝飯郡小坂井の菟足神社の氏子であったことから、その視線は小坂井段丘の「上」に対する「下地」であった可能性もある。旧説にとらわれず、複眼的思考で多角的に取り上げることも必要である。

江戸時代の記述には、下河地、下地、下河内とわけて、それぞれの大字地名をあげている。このことから、下河地=下河内が下地となった(改名された)とは簡単にいえない。



13世紀頃(鎌倉時代後期)の豊川河口付近
(「とよはしの歴史」より)

2 中世の下地

日本の中世は、平安時代の末期から室町時代にかけておよそ300年間である。古代から中世への転換期、激動期であった。

(1) 鎌倉時代の下地

鎌倉時代になると、すぐに二つの「牛頭天王社」ができたと言う説(「三河国下地名蹤綜録」)からみると、下地に人がかなり住んでいたことをうかがわせる。

さらに「牛頭天王社」建立から30年位で、吉祥山麓にあった聖眼寺が下地の開発を見越して進出してきたことは、下地の発展の基礎ができたと考えられる。

その後、次第に下地村の南西部が開け、まず「渡津の今道」ができて住居地区が南側に移っていった。



渡津の今道と言われている吉田大橋東

(2) 中世の聖眼寺

聖眼寺は、平安時代(9世紀中葉)ころ、吉祥山の麓に建てられ、鎌倉時代に下地村に移転したと言う。その後、寺伝等によれば、浄土真宗の開祖、親鸞聖人(1173~1262)が関東から京都に向かう途中、下地に立ち寄ったことが契機となり、聖眼寺は天台宗から浄土真宗(真宗ともいい、中世後期には一向宗とも呼ばれた)に転宗した。

注目すべきは短期間に、しかも争論も混乱

も無く宗旨を一変させたということである。在地の権力者・有力者の介入を許さず転宗したということは、聖眼寺が、アジール（聖なる自由な空間）としての一面を示している。

中世の社寺は、聖なる空間であり、また交換の場であり、市が立った。芸能人や職人、商人の移動もかなり自由があった。13世紀、聖眼寺の下地への移転は、この視点から、聖なる空間がもたらす商業的な機能も背景にあったことが考えられる。とくに渡河地点下地は人々や物資が集散した。そこに聖眼寺の存在理由があった。



200年前の聖眼寺（吉田名蹟綜録）

年号	西暦	聖眼寺履歴 <関連事項>
天安3	859	吉祥山の麓に建てられた
貞永2	1233	下地郷に移転
嘉禎1	1234	天台宗から浄土真宗に改宗
永禄7	1564	家康が本陣を置き、吉田城攻略
慶長2	1597	移設される
慶長9	1604	現在地へ再移設される
慶長12	1607	太子堂建立
貞享2	1685	太子堂を再建
貞享4	1687	松尾芭蕉が俳句を詠む
宝永6	1709	本堂を再建
正徳4	1714	本堂を修復
享保17	1732	薬師堂の焼失と再建
宝暦11	1761	本堂上棟

聖眼寺関連の年表（明治以前）

現在の聖眼寺に太子堂がある。17条憲法制定で知られる聖徳太子（574～622）は、日本の仏教興隆に多くの業績を残した。親鸞が京

都・六角堂に参籠したとき、聖徳太子の夢告によって導かれたと言う。

聖徳太子信仰は、親鸞が法然上人にめぐり合えたのも聖徳太子のお告げということで、浄土真宗では太子信仰が重んぜられた。多くの寺院では太子像を安置する太子堂が建てられた。聖眼寺に太子堂がある由縁である。

(3) 下地開拓と寺社



現在の聖徳太子堂

「その昔、下地に寺が四ヶ寺、宮が七社あり、その七社は下地開発七人衆の地の神様だと言ひ伝えられています。その一社が熊野権現で古くは下地町字麦原にあり熊野三社権現といいました。」（下地町資料集）

この伝説の“下地開発七人衆”は12世紀の半ば、稲荷社が建立されたころ、湿地の多い沖積低地でも微高地をなす自然堤防の上に居住したと考えられる。

この七人衆の開発拠点は、それぞれ“堀ヶ



下地開発7人衆（顕彰額）

谷津、城ヶ谷津、北ヶ谷津、溜ヶ谷津、箱ヶ谷津、高見ヶ谷津、棒ヶ谷津”といわれる。

3 戦国時代の下地

(1) 今橋城の築城と下地合戦

明応2年(1493)、武将牧野成時(古白)は、一色城(豊川市牛久保)を中心に宝飯郡一帯を支配していたが、東より勢力を拡大してきた今川氏親(1473~1526、家法「今川仮名目録」を制定し、戦国大名今川氏の基礎を築いた。義元の父)に屈し、その命で今橋城(後の吉田城)を永正2年(1505)に築いた。

この築城が、翌年から下地を舞台とする合戦が起こる契機となった。下地を挟んで西三河の松平氏と吉田城主との吉田城の争奪戦を仮に“下地合戦”と呼んでも差し支えない。そして約60年間で5回以上下地で戦争があったようである。理由は吉田城の置かれた戦略的位置にある。

下地の住民にとっては、長い間戦争で苦しめられたのは間違いない。

(2) 下地合戦 その1 (松平長親時代)

今橋城築城の翌年の永正3年(1506)に、今川氏親は今橋城を拠点に西三河に侵攻し、岩津城を落とし大樹寺に布陣した。

西三河の松平長親(家康の4代前)は、田原の戸田憲光と同盟を結び、今川勢の背後を襲って反撃し、今川勢を西三河から駆逐した。

その勢いで松平方の戸田憲光が、今橋城を攻撃し城主牧野古白を自害させた(異説あり)。古白の子、牧野信成は、下地から船で知多郡に逃れ、縁者にかくまわれたと伝えられている。こうして吉田城をめぐるのは、松平方の戸田氏と今川方の牧野氏が、豊川を挟んで対峙することになった。

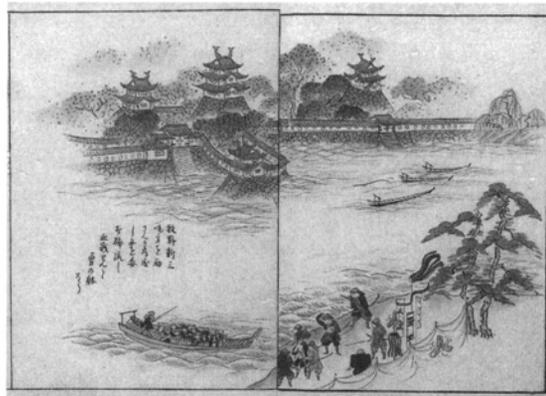
その後、成長した牧野信成は、永正15年

(1518)に今橋城を奪還した。そして、大永2年(1522)「今橋城」を「吉田城」と改名したといわれている。

(3) 下地合戦 その2 (松平清康時代)

若年ながら松平氏を継いだ清康(家康の祖父)は、譜代家臣の結束も強まり、また西三河諸将の人望も集め日増しに勢力は拡大した。そして三河国一円を支配下に納めようと東三河に侵攻した。ここに吉田城をめぐる今川・松平両者の衝突するところとなった。

享禄2年(1529)、松平清康は岡崎より出撃し、赤坂、小坂井を経て下地に布陣し吉田城を脅かした。精強を誇る松平勢に対し吉田城にこもる牧野氏4兄弟は、城から出撃し吉田川(豊川)を船で渡り、下地側の堤防をはさんで激戦を展開した(カラー頁の口絵2枚、下の絵および第3章参照)。



下地合戦の絵(吉田名蹤綜録)

そのとき、牧野4兄弟の内3人は下地の地で戦死し、一人新次郎(成継)は生き延びた(その子成里は後に家康、秀忠に仕えた)。

また戦死した牧野3兄弟と他の戦死者を葬ったのが「三本松牧野氏塚」である。

しかし松平清康は吉田城を手に入れた6年後に、尾張の守山城で家臣によって刺殺されてしまった。たちまち、吉田城は、戸田氏に奪われた。清康の死後跡を継いだ松平広忠は三河支配の力を持たず、駿河の今川義元を頼

った。嫡子竹千代（後の徳川家康）を人質として駿府に送った。竹千代が途中田原の戸田氏に奪われ、尾張に送られてしまった。怒った今川義元は戸田氏を攻撃し、渥美半島を奪った。松平氏を従属させた義元は、織田氏より竹千代（松平元康）を取り戻し駿府にとどめた。

しかし、今川義元が、桶狭間で敗死した永禄3年（1560）以後は状況が一変した。



牧野一族の碑

(4) 下地合戦 その3（松平家康時代）

岡崎に戻った松平元康（徳川家康）は、織田信長と同盟を結ぶや、今川方の勢力を西三河から追い出し、着実に東三河に勢力を伸ばした。

永禄6年（1563）7月に松平元康は、家康と改名した。この年9月に西三河中心に一向一揆が起こり、松平家康はその鎮定に追われ、東三河進攻が中断した。

一向一揆鎮定後の永禄7年、松平家康は本格的に東三河制圧にとりかかった。ここに東三河の要衝、吉田城をめぐる最後の攻防が始まった。そして下地村が戦闘の最前線におかれた。聖眼寺（現在の場所ではない）に本陣を構えた松平（徳川）家康は、目の前の吉田城をひとにらみしたあと、諸将に総攻撃を下知した。世にいう「下地合戦」の始まりであ

る。（注、松平家康は吉田城を攻めきれずに9ヶ月間兵糧攻めをした後、永禄8年に開城させたとの説もある。）

このとき家康は、聖眼寺の僧恵教（恵善）を使者として城に送った。後に僧和清と共に城に行き和睦を成立させた。吉田城は松平家康の支配下（城主 酒井忠次）となった。

4 江戸時代の下地

下地校区の江戸時代における地名は、三州宝飯郡渡津庄下地村である。江戸時代の村の主な出来事を述べてみよう。江戸時代は5街道が整備され、大名の参勤制度もあり、東海道に沿う下地村は、著名な人々が、旅客として留まったり、通過したりした。また、村内在住の文化人の活動もあった。

<差出帳にみる下地村>

豊橋市史第7巻の村況関係の項に、下地村差出帳（寛延3年 鈴木堅治氏蔵）が載っている。差出帳とは庄屋から吉田藩当局に提出

項目	軒数	%
庄屋	2	1.4
組頭	4	2.7
本百姓	72	49.3
水呑	64	43.8
地借り	4	2.7
合計	146	100

（注：軒数は竈（カマド）数で154）

人口	人
男	324
女	320
祢宜	7
医師	1
木免（挽）	10
桶屋	2
屋祢屋	1
合計	665



1800年頃の下地村西部～北部（吉田名蹤綜録）

された下地村の現況報告書である。寛延3年（1750）の頃は、江戸時代中期8代將軍吉宗から9代家重へと変わり、享保の改革の後、大飢饉がつづき農民の一揆や強訴・逃散が各地に起こった。前頁の表は、そのような時代を背景とした下地村の軒数（世帯数と考えられる）と人口である。

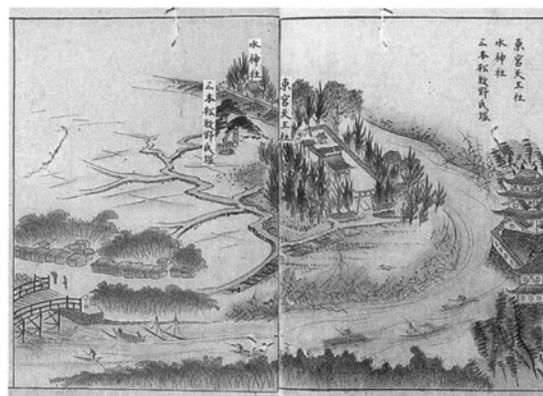
ところで、この表からほぼ世帯の半数は「本百姓」で、そして「水呑」を含めると93%が農民であると読み取れる。しかし、「水呑」をすべて農民とみなすことはできない。人口の表にある祢宜、医師の専門職8人と木免・桶屋など職人層は「水呑」に含まれている可能性が高いからである。

網野善彦氏が述べているように（『日本とは何か』講談社）、江戸時代は自給自足の農業社会ではなく商工業が発達した都市的性格が色濃い社会であり、「百姓＝農民、水呑＝貧農」では決してなく、多様な生業に従事していた人びとがいた。

下地村のように城下町吉田に直近の村では、各種の商工業が営まれて吉田の需要に応じていたはずであり、商人や職人・雇用人も多数いたと思われる。その人たちは差出帳の分類では、「水呑」に含まれていた可能性がある。

<山本貞晨の活動>

豊橋の郷土史を著す際、必ず参照する本がある。「三河国吉田名蹤綜録」である。著者



1800年頃の下地村東部（吉田名蹤綜録）

は下地村生れの山本貞晨であった。安永4年（1775）に生れた山本貞晨（権平）は、須磨板琴と号した。富裕な商家で文化文政年間には下地村の組頭をつとめた。彼は22歳ころから郷土史の調査を始め、寛政9年（1797）には「三河古経文奥書」を著し、その後も多くの著作を残した。

最初に下地についての「三河国下地名蹤綜録」があり、また羽田について書いたものを含めて、彼の名を後世に残した「三河国吉田名蹤綜録」（全3巻、1806頃）がある。

これは吉田及びその周辺の村々の地誌であり、地域の寺院・神社・名所旧跡・地名の由来などが多く挿し絵を加え、古文書を引用しながら解説されている。（『三河国吉田名蹤綜録の世界展』豊橋市美術博物館）

彼の業績については、上述の著書が以後の郷土関係のほとんどの文献に引用され、参照されてきたということに尽きる。

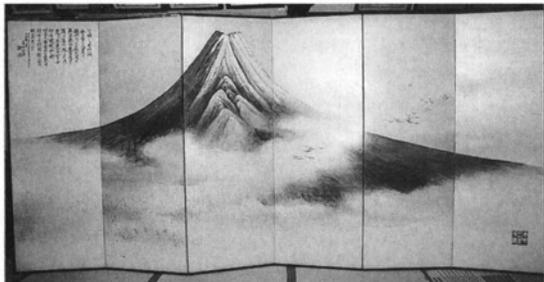
<鈴木拳山の画業>

鈴木拳山（1842～1915）は、江戸時代末期（天保13年）、下地村に生れた。江戸時代に、吉田や江戸で画業を学び、画家としての基礎を積み上げた。

帰郷後画風は文晁系から華椿系と幅を広げ、また魚介図を得意とした。残された作品は明治20年以降のものがほとんどである。

☆鈴木拳山の 略年表

年号	西暦	画業
天保13	1842	下地村に生れる。名は潜
嘉永5	1852	稲田文笠に絵画を学ぶ
安政4	1857	湊町神明社弁天堂の天井画
安政5	1858	稲田文笠主催に書画展覧会に「米法山水図」を出品
文久2	1862	大村町珠光院不動堂の天井画
慶応1	1865	江戸に出て鈴木鷺湖に師事
慶応3	1867	帰郷
明治1	1868	画号龍雨、成道から拳山へ改める 不動院に「虎図」絵馬を描く
明治7	1874	菟足神社の「故事図」絵馬
明治9	1876	菟足神社の「竹鶏図」屏風
明治17	1884	農商務省主催の第二回内国絵 画共進会に出品
明治39	1906	赤心社の絵を描く
明治44	1911	
大正4	1915	逝去（墓所 真光寺）



西部赤心社所蔵の絵



東部赤心社所蔵の絵

<松尾芭蕉と下地村>

わが下地校区に俳聖芭蕉の足跡がある。松尾芭蕉（正保1年～元禄7年：1644～94）が、「笈の小文」の旅程中、ここ下地の古刹聖眼寺に立ち寄り一句を残した（第3章参照）。

“ごを焼て手拭あぶる寒さ哉”（笈日記）

「旅宿の寒さに苦しみながら、土地に習いの古松葉を焚いて濡れ手ぬぐいなどをあぶっていると、冬の旅情がひとしお身にしみる。古松葉はパッと燃え立ってたちまち火勢の衰えるもの。そこに炬燵などと違い、先を急ぐ旅の朝のあわたましい気配が感じられる。「ごを焼く」という言葉と習慣とに興を覚え、その言葉をたよりに三河路の旅懐を詠じたもので、そこに一句の俳味がある。季語は「寒さ」で冬。（芭蕉句集 小学館）

ちなみに「ご」について、旺文社古語辞典は、『枯れ落ちた松葉。多くは、かき集めて燃料とするときにいう。』とあり、また岩波古語辞典では、『松の枯れ落ち葉。用例として「ごを焼いて手拭あぶる寒さかな 芭蕉』と下地のこの句を引用している。

また、「聖眼寺史 伊藤博敏著」では、状況をまじえて次のように記す。「・・・芭蕉翁が立ち寄ったと伝えられる御茶所は、太子堂のほとりにあったといわれ、本道裏手の池に臨み、古くは黒松の疎林にかこまれ・・・、御茶所にかけてこんだ翁の松葉をたいての句だとする従来の説は直ちに肯定出来難いとしても下地村で詠んだことは間違いなからう。」

そして、「芭蕉俳句大成 明治書院」では、江戸時代より昭和までの評釈を紹介している。

芭蕉が吟じた状況について、評者によって解釈が分かれているのも興味深い。

大別すると二つになる。

時刻	場所	状況
夕方	茶店	疲れた体を休める
朝方	旅館	旅の朝のあわたしき

<歌川広重と下地村>

江戸後期の浮世絵師で、風景版画家として人気の高い歌川広重（寛政9～安政5年：1797～1858）は、明治以降、安藤広重の名で広く知られることとなった。広重は歌川派の

絵師としては決して主流派とはいえなかったが、「東海道五十三次」に代表される風景画における大胆な構図は（天保3年：1832）彼の評価を高らしめた。

そしてその中に奇しくも下地村のたたずまいが、遠景ではあるが描写されている。江戸時代後期の下地校区を知る貴重な資料である。

一つは吉田城側から豊川を望み、吉田大橋の向こう側に下地村が描かれている（表紙の絵）。また下地村から吉田大橋を行き交う人々を描き、吉田城が背景となっている絵もある（カラー頁の口絵）。幸運にも下地村が姿を見せてくれている。

これらは広重が、現実に吉田や下地に来て描いたことを意味するわけではないが、当時の版画は正確な下絵を基にしていることから、単なる想像による絵であるとは考えられない。したがって下地校区にとっては資料的にも大切な絵である。

もちろん、下地村の描写が絵に出現しているのは、この広重の風景画「吉田」が初めてではない。江戸時代初期の屏風絵「大日本五道中図」（『江戸・東海道』平凡社）には、吉田大橋のたもとに下地村が描かれていることを付記しておく。



下地が描かれている絵（江戸中頃）

<江戸時代の出来事>

江戸時代の農村一般は年貢に苦しみ、封建的束縛にあえぎ、希望のない生活といった漠然としたイメージがあった。しかし、近年では活力のある庶民の生活がさまざまな実証的な研究から明らかになってきている。

特に下地村は橋一つで吉田城下と連続性があり、人々の交流も活発であった。町方の文化の影響を受けてきた。それらの中からいくつかの出来事をみってみる。

(1) 四ツ屋の由来

宝飯郡誌によれば、「天文7年（1538）、横州村（現津田校区）を開発してより、明治16年に至り356年になり、開発後92年を経て寛永6年（1629）、江戸時代に新田開発で庄屋取締りとなり、その頃わずか4軒なりをもって四ツ屋の字をなすに至る」という記述がある。

その4軒とは、山内長左衛門、小柳津伝左衛門、杉井甚八郎、外1軒である。明治の初めまでは、家屋は10～15軒であった。また、道中記に、四ツ屋については「京より下りに此所より初て富士山みゆる」とある。

明治27年（1894）8月29日、鹿管村大字津田字四ツ屋の全部と字重森、字東前の一部が下地町に編入された。江戸時代の四ツ屋の茶屋は現在の横須賀町の重森であった。

ところで、下地村の対岸船町は、古くは「四ツ家」といい、河原同様の土地であった。

姉川の戦い元亀元年（1570）に敗れた浅井長政の一族である浅井与次右衛門が天正年間に一族郎党83人を引き連れてこの地に移り住み、村をつくったといわれている（「とよはしの歴史」より）。豊川をはさんで、二つの「よつや」があった。

(2) 船運をめぐる争い

「とよはしの歴史」によると、下地村の対岸、船町には吉田湊の船着場があり、豊川（吉田川）船運（船による交通・運送）の終点であり、伊勢地方や江戸方面への回船（海上の運送に使う船）起点として繁栄していた。

その理由は、関ヶ原の戦い時に船を出して協力した船町の庄屋浅井与次右衛門に、城主

の池田輝政が船役を命じ、地子（税金）を免除した。また、船の建造費や修理費をまかなうため、旅人や荷物から利益（上前銭という）徴収の特権を船町に与えたからである。

ところが、寛文10年（1670）、九郎八郎が下地村に船着場を造り、この特権に挑戦し、勝手に荷物や渡海する旅人の取り扱いをしていると吉田城主に訴えられた。裁決の結果、船町の特権を侵害したとして九郎八郎は牢舎入りし、下地村の船着場は取り除かれ、“新規参入”は失敗した。

(3) 霞堤の影響

有名な霞堤（鎧堤）について、下地村主体に考えてみる。東三河一円を支配した池田輝政（1564～1613）にとって最大関心事は、吉田城防衛であったはずである。

この視点から霞堤建設を考えてみると、地政学的地位は明らかである。繰り返された下地合戦の記憶から、吉田城に押し寄せる敵軍に対して下地村は城下最前線である。

霞堤とは、堤防の一部をわざと開口しておくことで、洪水を河道から逃がすことができる堤防のことである。洪水時、大村に設けられた乗越堤から川水を乗り越えさせたことから、下地村は冠水をまぬがれることはできなかった。住民の苦難を思うべしである。

洪水時、豊川の堤防決壊を避けるという役割は、高く評価できるとしても、輝政は戦時に果たすべき別の役割を期待していたかもしれない。



大村の霞堤（1965年 町境より）

(4) 助郷騒動・・・農民パワーの爆発

慶応3年3月7日、吉田宿助郷総代、助郷取締などの幹部が課役金15,000両を横領したとして宝飯郡小坂井村の権四郎、篠東村の藤左衛門、瓜郷村の喜平、下五井村の喜三郎など数名の者が主唱し、同調した吉田宿助郷36余ヶ村の2,000人は、同郡鍛冶村地内に集合、同日夜、日勤総代正岡村の権右衛門、助郷総代の五右衛門の居宅を打ち砕き、8日には横須賀村ほか五ヶ村（下地村を含む）の助郷総代の居宅を打ち砕き、貯蔵の米や麦を水路に投げ込むなどの乱暴を働いた上、ついに吉田宿や人馬指などの役人の家をも襲撃するに至った。（吉田宿と助郷 近藤恒次）

理由はともあれ、助郷過徴によって農業に従事する時間の大半をとられ、急迫した農民のやり場のない不満が爆発したものと想像される。（助郷：江戸幕府が宿場近村の農民に人馬継立の課役を負担させられた村）

(5) 秋葉信仰ツアーと下地村

江戸時代も半ばを過ぎると庶民の力もさまざまな方向に発現した。その一つが“物見遊山”であり、社寺めぐりであった。遠州から東三河にかけて、当時盛んであったのが秋葉山信仰であった。ツアーのルートは遠州の掛川宿が起点の一つである。

ここから例えば、秋葉山まで旅して参詣し、ついで奥三河の大野を経由し鳳来寺山に詣でて、さらに豊川稲荷に立ち寄るというコースが人気であった。

その余慶として東海道筋の旅程中、下地村から豊川稲荷へのルートも利用された。かくして「稲荷せこ」がにぎわった。

稲荷せこは、慶長6年（1601）に東海道の整備に伴って開発されたと言われている。

そこには、豊川稲荷の遙拝所（ようはい）が設けられ、東海道を往来する旅人がここで豊川稲荷へ参

拜できるようにした。また、稲荷せこにあった鳥居は東海道の拡幅のため、昭和10年（1935）に取り払われ、戦後豊川稲荷の本殿前へ移転し、二の鳥居として現在も使用されている。



豊川稲荷の二の鳥居

<下地の金魚花火>

(1) 下地村と花火

毎年4月豊麻神社の祭礼のとき、奉納花火が赤心社や氏子の参加を得て、盛大に挙行される。今その由来を尋ねてみると、古くは下地村が小坂井の菟足神社の氏子であったころ（江戸時代）にさかのぼる。

花火は、鉄砲伝来以来、戦国の騒乱の中で火薬を取り扱う技術の発展とともに出現したものとされている。徳川幕府成立以前から、吉田天王祭に花火が登場し、日本各地でも打ち上げの記録がある。

江戸時代の下地村の花火は、菟足神社の祭礼「風祭り」と深くかかわって発展してきた。菟足神社の氏子であった下地は、小坂井・宿・下五井・瓜郷とともに、献上花火として始められた。

花火（煙火）の製作には、火薬の使用が付きまとう。常に爆発や火事の危険と隣り合わせであった。したがって、人家の密集する吉田の町中では認められるはずがなかった。恐らくは、近郷の里はずれで花火は作製されたことと思う。そこで下地村が花火作製の里であった可能性がある。

(2) 金魚花火の開発（1800年頃）

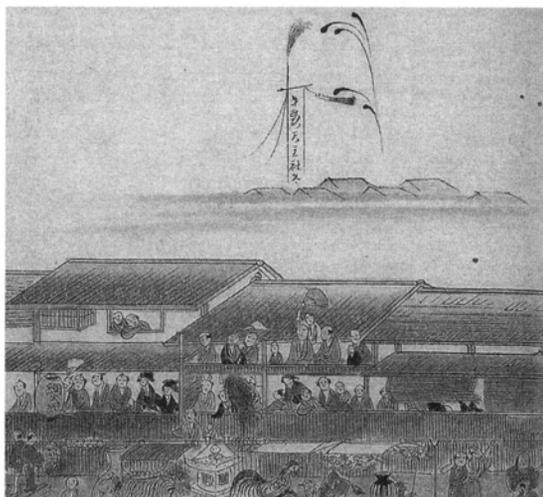
前述の「三河国吉田名蹤綜録 巻1」の最後に「下地祭礼試楽」が掲載されている。

[下地祭礼試楽の全文（現代文に修正）]

下地は小坂井の菟足神社の産子（氏子）であって毎年4月11日が祭礼である。10日の夜は、小坂井の社内にて花火を出す。9日の夜は、この下地の里で「番ならし」と言って花火を多く揚げる。豊橋の上には見物人が群参して、針を立てる余地もないほどである。その花火は、玉火、大なし、流星、綱火、大筒東西に4本ある。ことさら打揚げ等は種々ある。中でも「金魚という花火」は豊川の水中に放せば水底より数々もえ上る。火は、浮いたり沈んだりして、誠に一興があつて珍しいことである。」

その中で、**金魚花火**は、1806年頃以前から日本で最初に、奉納されていたことがわかる。

注）「三河煙火史」によると、文政5年（1822）岡崎天王祭に初めて金魚花火が菅生川で打ち込まれたと紹介されている。



吉田天王社祭礼での花火の絵図の一部
（三河国吉田名蹤綜録）

川向こうに下地の牛頭天王社の「のぼりと花火」が描かれている。

全国に有名な三河花火の歴史の中で、下地も花火の発展に貢献してきた証しである。

5 近代の下地（明治～昭和20年）

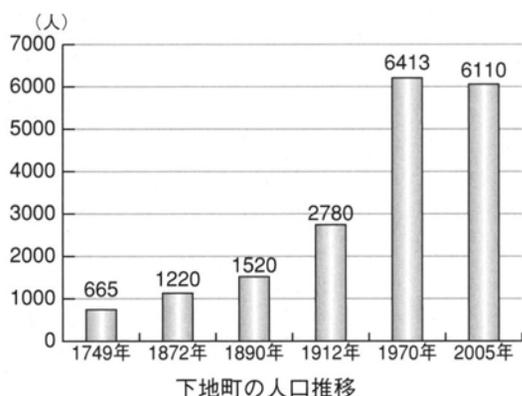
<社会編>

(1) 文明開化と下地

東海道の村、下地は明治維新（1868）後徐々に、明治新政府による一連の変革に取り込まれていった。街道も一変した。各地の伝馬所が陸運会社と改められ、輸送手段として、旅客や貨物を馬車で輸送する方法が始まった。内国通運会社によって明治9年（1876）には、東京～京都間に長距離馬車が走り出し、下地村も輸送馬車の疾駆する様子が見られた。

しかし、馬車輸送の時代は短く、鉄道に取って代わられた。当時（19世紀後半）の機械文明を代表する鉄道は、まさに文明開化の象徴であった。明治5年（1872）鉄道の開業とともに線路の拡大が始まった。明治21年（1888）東海道線の開通により豊橋駅舎が建てられた。豊橋駅は市街地に接していたためその後の発展に好都合であった。やがて人力車の営業も始まり、乗降客も増加していった。

明治初期の下地村は、宝飯郡役所の所管であった。



明治19年（1886）小学校令が制定され、翌年には下地小学校が尋常小学下地学校となり初等教育の整備も進んだ。また、御油警察署の管内として、下地巡査派出所が置かれるなど、明治国家体制が着実に下地村にも浸透した。

(2) 郵便事始と下地

システムの文明開化を象徴するものとして、郵便制度をあげることができる。

明治5年（1872）には、ほぼ全国に郵便路線は伸び、各地に郵便取扱所がおかれた。

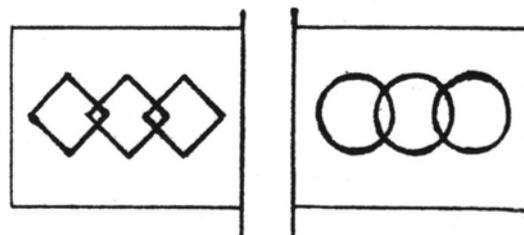
豊橋郵便所は、呉服町に開設され、書状集箱も各所に設置された。その後、豊橋郵便所は3回移転後、電信局と合併して札木町へ設置された。

下地村では、明治24年（1891）4月1日字豊岸に下地郵便受取所が開設された。これが下地郵便局の始まりである。その後の変遷は次のとおりである。

- ・明治38年4月 下地局無集局（3等）
- ・明治42年9月 局舎移転（豊麻83）
- ・大正8年12月 局舎移転（豊麻93）
- ・昭和7年10月 市へ合併に伴い下地郵便局
- ・昭和16年2月 無集配（特定）と官制改正
- ・昭和22年1月 局舎新築移転（下地町東）
- ・昭和56年3月 豊川改修工事で移転

(3) 花火と赤心社

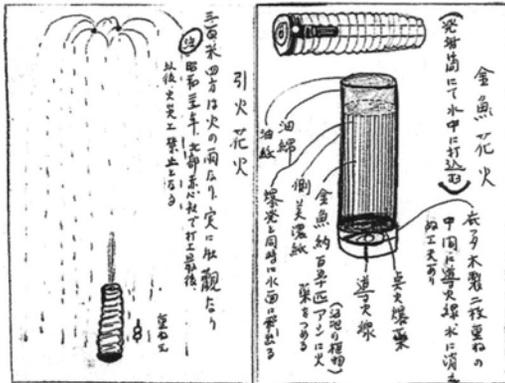
明治中期下地の若者たちは、東西に分れ、東部では結社名「愛生社」をつくり、井桁ちぎりを旗印として、西部（後に北部を分離）では結社名「教育社」をつくり、輪ちぎりを旗印とし、各々その勢力を競い合っていた。



〔井桁ちぎり〕
愛生社（東部）

〔輪ちぎり〕
教育社（西部）

東部の「愛生社」と西部の「教育社」の二つの若者結社は、あらゆる行事に競って参加し、その技術を高めていた。



引火花火と金魚花火 (小嶋氏提供)

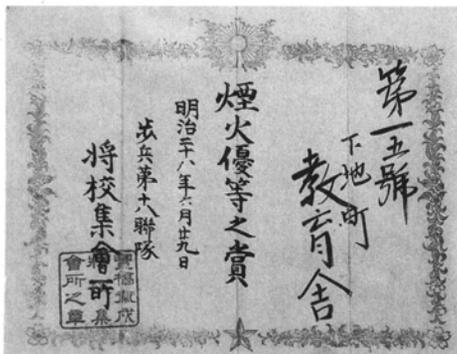
菟足神社の風祭りに献上する花火の技術も、下地の若者たちの創意と工夫で向上してきた。どこでも、この二つの旗を目印として、若者たちが競争し、お互いの力を磨いていた。

明治28年(1895)6月29日、日清戦争の戦没者英霊に対する招魂祭と日清戦争戦勝祝賀会が行われた。歩兵第18連隊営庭の将校集会所に臨席された小松宮の前で、羽田八幡宮、吉田神社など市内の花火所の若者たちと共に招待された下地の「教育社」と「愛生社」の若者たちが、広場で手筒花火と引火花火を上げ、城向の河岸で金魚花火を見事に奉納した。

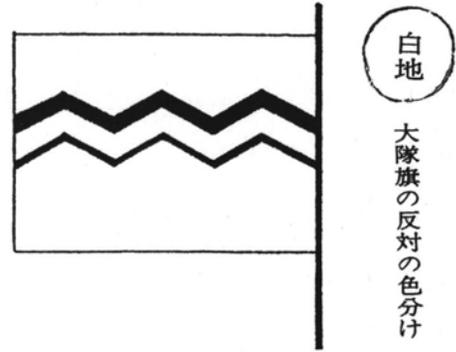
<そのときの花火>

種類	数量	花火製作者
手筒花火	101本	愛生社、教育社
引火花火	101発	中村卯平、他
金魚花火	1発(150匹)	小嶋彦蔵

小松宮からは特に、金魚花火のすばらしさを賞賛され、賞状を頂いた。



煙火優等の賞



下賜された赤心社の旗印

そこで、佐藤連隊長から下地の若者が一つにまとまるようにと諭され、社名を「赤心社」と改め、旗印として連隊旗の彩りを変えて使ってもよいとの提案がされた。

ここに下地の若者は一つにまとまり、「赤心社」の旗印のもとに力を合わせて下地のために貢献しようとした。それ以来、110年以上「赤心社」の名前を引き継いでいる。

(4) 明治末期から昭和初期の花火

菟足神社の風祭りは、宵祭りに花火を全部発揚するために昼揚げが盛んで、夜は手筒花火や仕掛(建物)花火が出された。

元下地(当時、町内の4小区画の慣称は、東下地・西下地・城ヶ谷津・元下地)を中心に花火の技術が引き継がれ、それに新技術を加えて菟足神社の奉納花火に貢献してきた。菟足神社から花火師の許可証が出ていた。

また、下地町は菟足神社の祭礼に長年、氏子として参加してきたが、豊橋市へ合併することなどの事情によって、菟足神社の氏子を離れることになった。

<産業編>

(1) 産業の発展

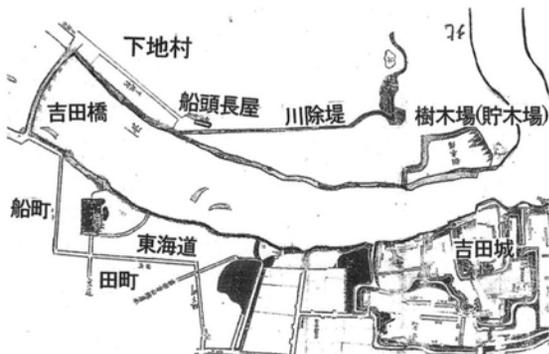
明治時代、下地でも回船業が自由に行えるようになった。そのため、下地の河岸に船着場の設置が許可され、水運(船運及び回船)を利用した商業・工業のため、業者が下地に

集まり、豊橋から四ツ屋の河岸には回船問屋などが集結してきた。

下地では、商業・工業が急速に発展し、豊川上流からの船運（鶴飼い船）が発着し、また三河湾から太平洋へ出る回船も発着するようになった。伊勢参りの旅人や荷物の発着の基地となり、明治時代には船町より栄えたといわれている。

(2) 製材と木工業

江戸時代の吉田城の地図をみると、対岸の下地村に貯木場が載っており、「船頭長屋」が記載されているのも興味深い。



吉田城の地図の一部（1795年頃）

明治時代になると、製材業、材木問屋、木工業、建具、大工などの木の加工業が発達した。明治末には、製材業が6社以上あって、製材を利用した木材産業で多くの人が生計をたてていた。

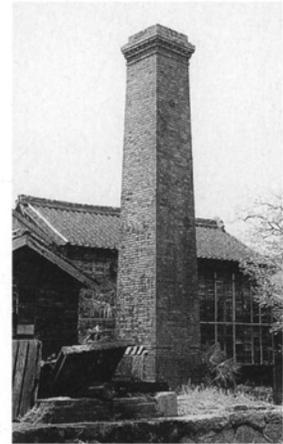
(3) 製糸業、製造業、卸売業、他

明治20～39年にかけて、下地に、生糸・玉糸業者（製糸業）が次々に設立された。明治末の記録では、生糸・玉糸業者が10社以上になった。製糸業者は、太平洋戦争中に1社に統合され、戦後数社が復活再開したが、昭和20年代ですべて廃業となった。

水運を利用した産業が下地に育った。江戸時代から山三商店が肥料等の商いを始めており、明治以後の下地の発展に大いに貢献した。

明治中期には、旧東海道に沿った地域を中心に、「下地町は宝飯郡で最も繁栄した町であった」と書かれた（明治26年発行の宝飯郡誌）ように、製造業、卸売業、小売業、サービス業、金融業等が集中していた。

明治末には、大手会社として酒造・販売業が2社、肥料店が2社、東参倉庫株式会社、東参青物合名会社、東三酒造組合が記録されている。その他、材木商、建具商、米穀商、陶器商、雑貨商、煙火業、金融業（宝飯銀行頭取は下地出身者）等があり、下地の繁栄を支えていた。



明治の面影を残すレンガの煙突

(4) 大正・昭和（20年まで）時代の産業

下地は大正時代も、生糸・玉糸の製糸業の豊橋を支える町の一つとして繁栄した。豊川の水運を利用した各種製造業、加工業、商業、倉庫業等の繁栄が継続していた。そして、現在の下地町5丁目には大木船大工ができ、百石船が作られた。

さらに、大正14年（1925）飯田線下地駅の開業により、四ツ屋及び周辺の卸売業、小売業等への好影響があった。また、潮干狩り客、釣り客、川遊び客などの用船への乗り換え客で賑わった。

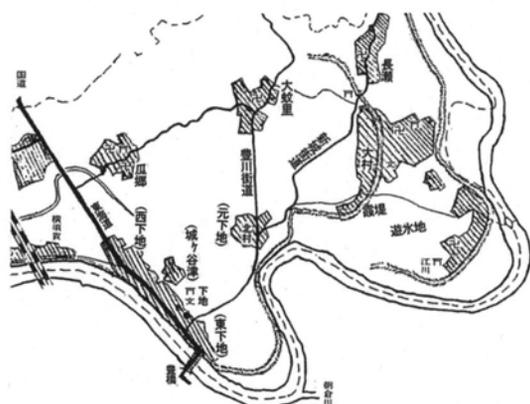
昭和初期には、愛知県の郡部町村別の納税額が3位内であったようで、豊橋への合併の引き金になったとも言われている。

しかし、水運が次第に鉄道輸送や自動車輸送に代り、衰退した業種もあった。

(5) 農業

明治時代中期以後、生糸の増産と輸出が国家政策にそって奨励され、養蚕業が下地の農家の副業として拡大し、生糸・玉糸の町豊橋の一翼を担ってきた。しかし、昭和10年代には、戦時色が広がり生糸の輸出が困難になって養蚕は衰退していった。第2次世界大戦後も一部に養蚕農家があったが、次第になくなった。

また、農業基盤の整備と二毛作増進のため、昭和8年(1933)から耕地整理が開始された。



明治時代末の住居地と道路

<明治から昭和20年までの主な出来事>

(1) 米騒動と町民の団結

第1次世界大戦中の大正7年(1918)、富山県から起こった米騒動は、またたく間に全国に広がり、8月12日に豊橋市街から下地まで及んできた。

「東三河の歴史」によると「8月12日に、ついに豊橋で米騒動が勃発した。船町の豊橋より下地へ襲来し、米屋7軒に対し順次米の廉売を迫った。米屋一同協議の上、14日より聖眼寺の広庭において共同廉売する旨のピラを所々へ張り出し、各戸へは共同廉売の札を掲げ、一方聖眼寺にて廉売に取りかかった。」とある。

14日の廉売を前に、再び暴徒化した人たちが豊橋を渡って下地に差し掛かるのを、警官、

米屋、役場員、議員などで豊橋を防波堤としてくい止めること、および町民の団結が暴徒の心を鎮める一因となった。

(2) 下地にできた火力発電所

明治28年(1895)に豊橋で最初の水力発電所が牟呂村大西地区にできた。明治41年(1908)に歩兵第15師団が高師に設営されたことによる電力需要の増大に対応のために、明治43年に下地町に火力発電所(出力150kW)が建設された。(現在の(株)ササキ付近)

(3) 宝飯郡下地町へ豊橋市の上水道給水

大正12年(1923)、豊橋市に都市計画法の適用が認可され、大正14年(1925)に下地町が豊橋市の都市計画区域に編入された。

上水道の敷設には将来の需要を見据えての適正な規模が必要であり、またその費用の捻出のため供給地域を下地町まで広げて工事が進められた。当時、町内の税負担力が大きかったことが市中心部と同時に、上水道の供給地域になったと言われている。水道管を豊川に渡すために水道橋を建設し、昭和5年(1930)市内と同時に、旧東海道沿いの地域に通水された。



手前の橋が水道橋(1978年頃)

(4) 幻に終わった下地始発の鉄道

明治26年(1893)に、豊橋で有志22名が発起人となって軽便鉄道計画が持ち上がった。その計画では下地町から牛久保をへて豊川に

至る約6kmの軽便鉄道を敷くものであった。

しかし、明治29年(1896)に豊川鉄道株式会社が設立され、鉄道の起点を東海道線と連絡する位置に変更し現在の飯田線の位置になったために下地を通る鉄道は幻となった。

6 現代の下地

<第二次世界大戦後から昭和の終りまで>

(1) 戦災復興

戦後(以降、第2次世界大戦後を示す)、一部を除き戦災にあった下地の復興は、豊橋市としての戦災復興計画(昭和21年(1946)、豊橋市戦災復興事業計画)に従って実施された。



米軍機の空襲で焼失した地域(1945年)

戦災後の下地小学校の子どもたちは、焼け残った空工場や豊麻神社の社務所を教室として学んだ。昭和21年は高等科5・6年の生徒は100部隊兵舎跡(現豊城中学校)までかよった。9月に、校区の木材業者の資材提供や大工さんの勤労奉仕によって豊橋初の校舎が完成した。衣食住のすべてにわたる耐乏生活の中、下地の子どもたちは、明るく伸びやかに遊びまた学んだ。紙芝居屋の拍子木の音やカンけり、縄跳び、くぎ打ちそして、取っ組み合いのケンカ。広場や道路は安全で、さらに裏作をしない田が子どもたちの天国であった。やがて朝鮮戦争(1950~53)を境に配給

制や代用食とも縁が切れ、生活全般が改善された。

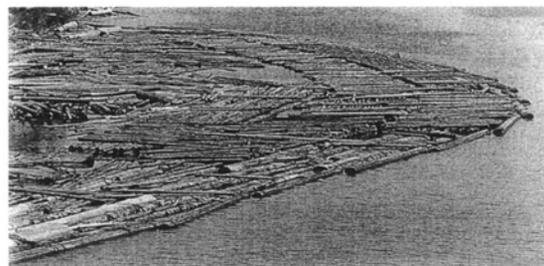
(2) 高度成長期と下地

昭和30年(1955)頃から家庭電化製品が現れ始め、日本は欠乏の時代から欲望の時代へ変化した。本格的な家電ブームは、三種の神器といわれた電気洗濯機・テレビ・電気冷蔵庫の出現であった。

下地の農地は昭和30年に区画整理が完了し、吉田大橋ができた昭和34年(1959)頃から、豊橋市と豊川市の間接地帯として下地に注目した自動車の販売店や修理工場が、旧国道151号線(現県道400号線)沿いにでき、店舗数が急激に増加していった。最初に日産自動車が販売店を建設すると、続いてトヨタ自動車他の販売店ができ、自動車の街道となった。

そして、国道1号線が全部開通(昭和37年)すると、工場・店舗の建設が1号線沿いに移った。ヤマサ本社工場は国道1号線開通前に工場建設に取り掛かっていた。

一方、地場産業であった製材工場は、二つの国道の完成、トラック輸送の発達、輸入木材の増加などによって、豊川利用の地の利が薄れ、衰退・撤退してゆき、江戸時代から豊川河畔に見られた貯木場は昭和45年(1970)頃に姿を消した。



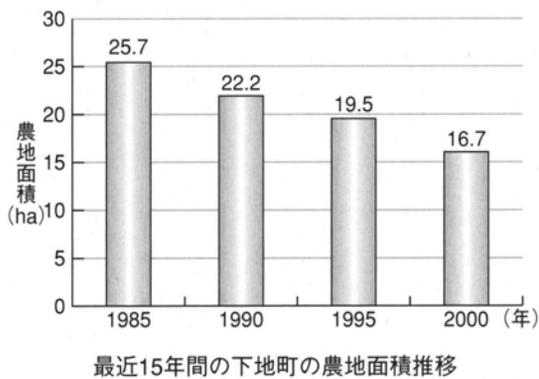
貯木場(1964年)

水田の面積は、46年間で次のように激減した。

昭和35年(1960) : 88ha

平成18年(2006) : 15ha (17%)

(松原用水土地改良区管理所調査)



(3) 校区の分断

現代の下地校区を規定するものは、豊橋^{とよばし}、吉田大橋、国道1号線、県道400号線（豊川街道）である。元来下地は陸上交通にめぐまれていた。豊橋市街に近く、飯田線の下地駅（横須賀町）にも近く、また豊川街道には早くからバスが開通していたので、ほとんどの住民は徒歩で10分以内に交通機関を利用でき、交通上は何ら不便を感じず生活できた。



国道1号線開通時の航空写真（1962年）

道路によって分断された校区の空隙は、道路に沿って自動車関連産業の進出とその周辺の宅地開発によって次第に埋まっていった。結果、ミニスプロール化といってよい状況が生れた。バランスを欠く住宅地と工業地区が混在する地区となった。

(4) 失われたランドマーク

豊橋市街地の人々から目立ち親しまれてきたものに、松葉町の「額ビル」、下地の「一

本杉」があった。向岸の吉田城址に対峙し、屹立する雄姿はまさに下地の象徴であった。しかし今や、「額ビル」は姿を変え、「一本杉」は落雷で枯れたため昭和45年に伐採されてしまい、住民にとってはさびしい限りである。

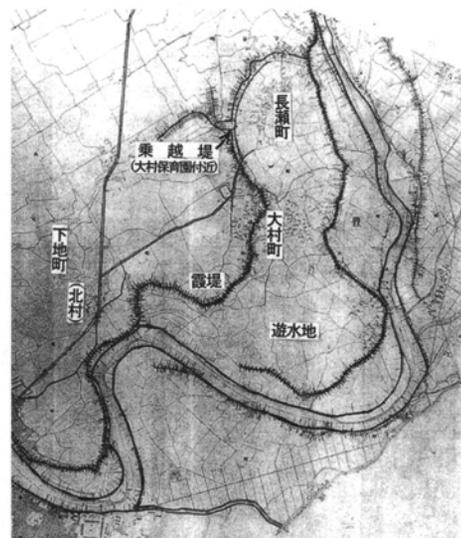
伐採前に代替えのため若木を植えたが、堤坊の整備が優先されて取り払われた。伐採当時は経済発展の道をひたすら突っ走っていた頃である。自然回帰やゆとりを求める時代ではなかった。



伐採寸前の枯れた一本杉（1965年頃）

(5) 豊川放水路の完成と霞堤の終焉

戦後の下地に大きなインパクトを与えたものは、昭和40年(1965)3月の豊川放水路の完成である。と同時に霞堤も閉め切れ、戦国末期以来の役割を終え、歴史的遺構となった。



大村霞堤（1935年頃）

洪水時、遊水地となっていた当古地区や大村地区の人々に毎年起こる水害の恐怖から、また霞堤から流出した洪水が下流の下地地区まで達し、田畑や道路が冠水していたことから、解放される期待が大きかった。

この豊川放水路の完成は、下地地区の人々に安堵感をもたらすとともに、洪水の恐れが減少することは、下地への商工業の進出と住宅建設に拍車をかけるきっかけとなった。

＜戦後の災害＞

(1) 台風の教訓

戦後の復興も軌道にのり人々の顔も明るくなってきたちょうど、そのころ豊橋地方は大きな災害に見舞われた。昭和28年（1953）9月の台風13号（最低気圧957hPa、最大瞬間風速39.9m/s）と昭和34年（1959）9月の伊勢湾台風（名古屋で最低気圧958.5hPa、最大瞬間風速45.7m/s）である。台風13号で下地小学校の木造校舎1棟が倒壊した。

二つの台風による教訓は、下地校区を含めて豊川河口付近の低地では、満潮と台風の接近が重なれば高潮の被害を受けることは確実である。特に満潮時には河口より約12km上流（放水路分岐点付近）まで潮が満ちることを考えておかねばならない。

(2) 下地を襲った竜巻

昭和44年（1969）は、8月の台風7号による被害が癒えぬ年の瀬の12月7日、突然下地町は竜巻に襲われた。午後6時2分頃、西橋良町付近に発生した竜巻は、北北東に移動し、中郷町、関屋町、下地町、大村町に至る幅約150m、延長4.9kmにわたり市街地を縦断した。市街地の大半が停電し、竜巻が通過した町々に家屋の損壊や負傷者が続出した。なかでも最も被害が多かった下地町に現地対策本部が設置された。避難所の下地小学校へは毛布・

非常用食糧などが持ち込まれた。

人的被害は死者1名（下地町）、重傷8名他軽傷者多数。物的被害は全壊家屋10世帯、半壊等あわせると130世帯を超えた。農工商関連の諸施設にも多大の被害を与えた。

下地の国道1号線沿いにあったドライブインは壊滅的な被害を受けた。

(3) 界雷豪雨と七夕豪雨

校区にとっての現実的・体験的脅威は、集中豪雨による被害である。昭和40年（1965）以降の（台風以外）主なものをあげる。

昭和41年（1966）10月12日夜、最大時間雨量149mmという記録的な集中豪雨（界雷豪雨）にみまわれた。朝倉川の氾濫は、警察官を含め死者・行方不明者9人の犠牲者をもたらした。下地町も道路冠水や住宅浸水など被害を受けた。



昭和49年（1974）の七夕豪雨での出水

昭和49年（1974）7月7日の集中豪雨（七夕豪雨）によってもたらされた豊橋市の被害は、台風13号に匹敵するものであった。下地町では道路・田畑の冠水から家屋や宅地への浸水と被害は広がった（下地校区と津田校区で床上浸水27戸であった）。堤防で守られる現代都市は内水氾濫に弱いといわれるが、豊川放水路の完成で安心して下地町の人々に大きなショックを与えた。この年、町内に雨水排水ポンプの設置が計画されたが、その実現（3機設置）は10年後（1984）であった。



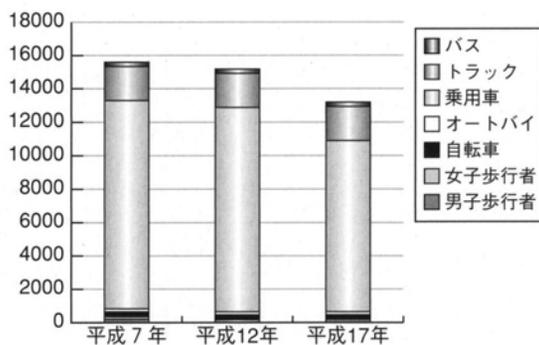
豊川への排水管

<平成時代>

(1) 生活意識と環境の変化

昭和64年（1989）1月、年号は平成に代わり、やがて21世紀をむかえた。世界はグローバル化が進みはじめた。日本では高齢社会・少子化社会が始まり、われわれの生活環境は変容してきた。豊橋の中心でも商店街の衰退・空洞化が心配され、都市再生が課題となってきた。市街地と一体化が進んだ下地校区もその影響を受け、小売店が減少して住民は郊外や豊川市の大規模店など、買い回り圏を拡大してきている。

校区を巡る道路環境は、瀬上の交差点、豊川の堤防道路と吉田大橋、豊橋の交差する地点が、上渡津橋の開通（平成14年）後も渋滞や騒音に悩まされている。生活の拠点としての下地校区が安心して暮らせる町、自然を残した静かな町であることを願うようになってきた。



瀬上交差点：交通量の推移

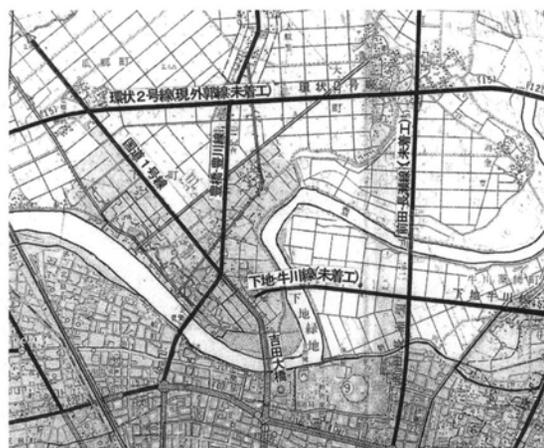
(2) 中核市と下地

中核市豊橋において、市役所を中心に半径2km以内は“都心”と見なして差し支えない。そこには都市の中核機能が集積していて業務中心地区（CBD）をなしている。下地校区はもちろんその中に入るが、“都心”の実体はない。文教地区でもない。例えば、市内の生涯学習施設の分布を見ると下地校区はもとより大村校区や津田校区も校区市民館、地区市民館を除けばゼロである。公園として整備された所もない。東部丘陵地域は充実しているが、市役所の眼下に見える下地などの市北西部の低湿地域は文化施設から見放されてきた。



市内の主な学習施設

下地校区は、この中核市の中核部分に位置しながら、そのふさわしい実体を持っていない。自然条件のマイナス部分を補って、豊川を活用した環境と共生の住宅・文教地区としての一層の整備が望ましい。



下地周辺の主要道路と計画図（1968年作成）

(3) 竹もらい行事の復活

日本各地では、平成時代に入って伝統文化や郷土芸能・祭りなど復活再興が盛んになってきた。従来、下地の「竹もらい」行事は4月1日に行っていた。しかし、昭和30年代に旧東海道の交通量の増大より中断されたが、平成5年（1993）に復活し、毎年4月の第1日曜日に行っている。下地の伝統文化の復活と継承の始まりである。

現在、子ども会が加わり、赤心社と校区総代会が一体となってこの行事を守っている。

下地町の西の町境を13:00に出発し、旧東海道を^{とよばし}通って豊橋の交差点を渡り、吉田大橋手前でUターンして、稲荷せこから小学校南側を^{とよばし}通って豊麻神社に16:00頃到着して終了する。途中で何回かの休憩時に、参加者や見物人に飲み物・菓子類を配っている。



最近の「竹もらい」（四ツ屋にて）

しかし、校区全体の催し物としての盛り上がりには欠ける傾向にあるので、全校区の関心と協力を必要としている。豊麻神社祭礼の幕開けを告げる伝統行事として継承発展を願う。

(4) 災害に強い校区作り

下地校区は、豪雨対策としては豊川放水路の完成以後、雨水集水用暗渠とポンプ場の稼働など施設の整備は進んできた。



下地校区の避難所

2000年以降、日本各地で桁外れの集中豪雨が発生し、洪水が多発している。豊川流域が想定外の集中豪雨に襲われると豊川放水路も万全ではない。一定以上の時間雨量を超えると四ツ屋のポンプ場がフル稼働しても対応は困難という。校区として決して安心できる状態ではない。



内径3mの雨水集水用暗渠内部（2001年12月）

また、江戸時代末の安政東海地震（1854）は、2日間連続して発生した東海地震と南海地震をさし、下地村の倒壊家屋は47軒であったという。

この地震から150年以上経過しているので、次の東海地震が危惧されている。

ハザードマップにみる下地校区の地下は、昔は海で地表から2～3m下は、砂礫の層になっており、地震発生と共に“液化化現象”が起こる可能性が高く、被害から逃れることはできない。

下地校区では、町内会中心の自主防災会が設置されているが、休眠状態のところもあり、防災意識の向上が求められる。消防団第8方面隊下地分団の災害対策活動に積極的な住民参加が望まれる。



下地校区の防災訓練（豊麻神社・2004年）

<下地校区の今・平成18年（2006）>

<堤防と豊川>



上流（水神～北部地区市民館）



堤防（旧一本杉～水神）



中流（昭和45年頃まで貯木場があった）



下流（戦前船着場があった）

<道路と町並>



旧東海道（下地町6丁目）



国道1号線（ヤマサ付近）



県道400号線（境田交差点付近）



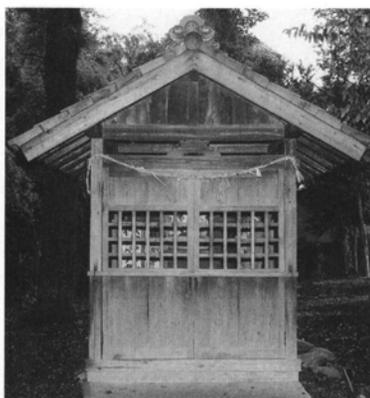
鎮守の森（豊飯通5丁目）

7 未来への遺産とメッセージ

豊橋市は地域の伝統的な文化を継承し、新たな文化創造につなげていくため、貴重な文化財の保護や歴史的町並みの保全を図ることをめざしている。下地校区にも次世代以降に伝え、残すべき文化財等がある。その一部を写真で紹介する。



水神社（豊飯通4）



若宮八幡社（豊飯通5、佐藤家）



東の宮牛頭天王社本尊
（大通2、杉浦家）



三ツ観音（下地町4）



熊野三社権現（下地町5）



白山権現社（豊飯通4、小嶋家）



天満天神社（豊飯通6、石田家）



薬師堂（豊飯通2、石田家）



辻観音（稻荷せこ）



四ツ屋水神社（下地町6）



西の宮牛頭天王社（大通4）

第3章 教育と文化

1 学校教育

(1) 三宝保育園について

〔三宝保育園の由来〕

明治38年(1905)、聖眼寺第22世尊勝上人が、日露戦争後の遺族や困窮者の母子を引取るために、日本で最初の福祉事業となる軍人保護院及び授産所を開設した。尊勝上人が明治42年に39歳で遷化した後、大正4年(1915)に閉鎖となった。

昭和8年(1933)第24世勝真上人が聖眼寺境内に下地幼稚園を開設して幼児教育に専念されたが、太平洋戦争による戦火で園舎を焼失してやむなく閉鎖となった。

太平洋戦争後の昭和22年に母子寮、授産所、保育所(三宝保育園)、診療所の総合的社



三宝保育園

事業を開始した。昭和28年勝真上人逝去後、第25世勝道上人がその遺業を継承し、保育所では園舎の増改築を行い、定員を増加し、昭和35年より乳児保育を開始した。昭和57年勝道上人逝去後、第26世勝信住職が継承し、平成17年(2005)には母子生活支援施設を改築

し、保育所と併せ2施設を設置経営し、現在まで継続している。

〔進化している保育環境〕

午前7時から午後7時までの延長保育 近年、夫婦共働きの家庭が増え、従来は午前8時から午後4時までであったが、朝は1時間早く午前7時から夕方は3時間遅く午後7時まで延長し開園している。夫婦共働きの方々に大変喜ばれている。

地域の人達との活発な交流 保育園では季節行事として運動会、発表会、餅つき会、豆まき会など楽しい行事を行っている。運動会や発表会には年寄りの方を招いたり、老人ホームを訪問して歌ったり踊ったりして、地域交流も行っている。

平成15年度よりお相撲さんとの交流を図り、平成17年度には大村校区出身の武雄山関を招き楽しいひと時を過ごした。

校区の体育大会には年長児鼓笛隊が参加し行事を盛り上げている。

また、情操教育では体育、英語、音楽の指導の充実を図るために、外部講師を招いている。平成17年度からは茶道を取り入れ「静と動」の大切さを知ってもらう教育を始めた。

楽しいお泊まり保育 毎年、年長児の1クラスが9月の前半に保育園に一泊する。子どもたちの自立を願い、先生方と一緒に泊まり、食事、勉強、遊びを行っている。参加人数は毎年30数名である。

保護者の「頑張ったね!」とあちらこちらで聞かれるお泊まり保育である。

(2) 下地小学校について

① 我らのシンボル「大いちょう」

小学校の職員室前にそびえ立つ「大いちょう」は、本校の新築を記念して、明治15年(1882)に植樹された。(開校記念植樹説明板より) 小学校の開校は明治6年10月18日「第10中学区第36番下地村小学豊麻校」として、聖眼寺に開設された。その後、明治15年に現在の場所に学校が新築され移った。その時の記念樹である。

春には新緑で着飾り、夏には木陰で児童を抱き、秋には黄金色に輝き、冬には空高く枝を上げた雄姿を見ながら、下地の子どもたちは明るく、たくましく育っている。平成16年(2004)には豊橋巨木名木百選に選ばれた。



大いちょうの木

② ころも元気、からだも元気(健康教育)

昭和56年(1981)57年の2年間、豊橋市の研究指定校として健康教育に取り組んだ。児童の生活パターンを朝型に変えたり、学校・学級保健委員会を開催したり、はだしの生活をしたりして、子どもたちの体力向上・健康に努めた。

この取り組みが継続され、昭和61年62年には、朝日新聞社主催の健康優良校愛知県代表に選ばれ、表彰を受けた。

健康教育と共にスタートした「豊川横断水泳大会」や好ましい人間関係を築くために行われた「ぎんなん活動」は現在も続いている。

③ 地域に根付く「豊川横断水泳大会」

健康教育の一つの挑戦活動として昭和57年から「豊川横断水泳大会」が始まった。最初は「豊川横断をめざす会」であった。当初は、お城下から金色島までであったが、現在は吉田大橋と豊橋とよぼしの間の左岸(関屋町)から右岸(下地町)までである。

子どもたちは自分の実力を測る機会であり、流れる川への挑戦でもある。6年生になると、「豊川横断水泳大会」を行うことになっているので、子どもたちはそれを楽しみに、そして300m平泳ぎで泳ぎきることを目標に努力している。平成17年(2005)で23回行うことができ、保護者のなかには自分が子どもの時に参加した人も出てきた。泳ぎだしの緊張、泳ぎきった喜びが聞こえてくる。



豊川横断水泳大会の様子

④ 学力を高める授業(基礎・基本の教育)

学力低下を懸念する声の多い中、下地小学校は、いち早く基礎・基本を洗い出し、子どもたちに基礎・基本を定着させ、それを基盤に問題解決する力を培う研究を始めた。

特に国語・算数を中心に、少人数指導の授業、読み書き計算を重視した朝学習・家庭学習・補充学習に取り組んでいる。

子どもたちは日々真剣に学習に励んでおり、算数については着実に学力が向上している。

(3) 北部中学校について

① 帽章の由来

北部中学校は、昭和22年（1947）4月1日豊橋市立北部第一中学校として開校。生徒数312名。翌年9月、豊橋市立北部中学校と改称。校名変更に伴い帽章を改定することになり、職員による記章制定委員会で数種の原案を作成し、生徒・職員・校区民の総意により決定された。

上部の開いた形は北であり、水色は永久に変わらぬ豊川の清流によって出来上がった校区の将来の発展を、その上に大きく配した

「中」（白色）は、北中健児が北中生徒の誇りと自覚をもって大きく伸びるようにとの願いをそれぞれ表している。



帽章

② 為せば成る

北部中学校のモットー。平成5年度（1993）全校生徒より公募し、全職員で検討の結果決定した。本館玄関に飾られている木彫額は、当時の木戸忠雄校長が揮毫し、美術科担当の大野清久教諭が木曾檜の一枚板に彫刻したものである。



各種大会への壮行風景

学校（学年）行事を実行したり、各種大会に参加したりする時の北中生徒の意気込みを表す言葉として、全校生徒の合言葉となっている。

③ 輝かしい部（クラブ）活動の実績

北部中学校は部活動やクラブ活動で、多くの立派な成績を挙げてきた。この伝統は、先輩から後輩へと着実に受け継がれている。

《栄光の足跡》

和暦	西暦	部（クラブ）名	競技会名	成績
S38	1963	相撲部	東三大会	優勝
S40	1965	男子ハンドボール部	県大会	優勝
S41	1966	男子ハンドボール部	県大会	優勝
S41	1966	女子バレーボール部	東三大会	優勝
		女子バレーボール部	県大会	3位
S42	1967	地理クラブ	全国学芸コンクール	文部大臣賞
S43	1968	社会科クラブ	全国学芸コンクール	文部大臣賞
S48	1973	男子テニス部	県大会	3位
S55	1980	女子バレーボール部	東三大会	優勝
S57	1982	女子テニス部	県大会	3位
S57	1982	女子剣道部	東海大会	優勝
S58	1983	女子バレーボール部	東三大会	優勝
S62	1987	男子剣道部	県大会	準優勝
H4	1992	女子テニス部	県大会	入賞
H7	1995	男子バスケットボール部	東三大会	優勝
		男子バスケットボール部	県大会	3位

④ 人間力を育む学習指導

平成16年度（2004）から3ヶ年、豊橋市教育委員会より「学習指導」の研究委嘱を受け、全職員が一丸となって研究実践に取り組んでいる。

北部中学校では、「人間力」を「学校生活全般にわたり、仲間や社会とのかかわりを大切にしながら、常に自分を高めていこうとする力」とおさえ、学習意欲の向上を図る授業の創造を核に、将来の夢や展望の持てるキャリア教育にも力点をおいて、目指す生徒像の具現化に向けて取り組み、大きな成果を挙げつつある。



学習指導風景

2 社会教育

(1) 市民愛市憲章の実践

下地老人福祉センター入口の右隣に、市民愛市憲章のスローガンが掲示してある。

- 1、心をあわせ美しい町をつくりましょう。
- 1、よく働き豊かな町をつくりましょう。
- 1、愛情をもちあたたかい町をつくりましょう。
- 1、きまりを守り明るい町をつくりましょう。
- 1、教養をたかめ文化の町をつくりましょう。

これは、地域の人達が力を合わせて取り組んでいく共通目標として掲げられたものである。地域の活動に参加することによって、地域の人とのふれ合いが発生し、思いやりと共存の精神を養おうとする決意である。

地域の活動とは、総代会や氏子総代会・赤心社及びPTA活動と自主団体が運営するスポーツ振興活動（剣道・弓道・野球・サッカー等）並びに市民館など町内の施設を利用した文化活動（稽古事や市民館祭り）などが挙げられる。これら一連の活動そのものが社会教育活動と言える。

(2) 社会教育活動

校区の恒例行事としては、竹もらい（4月）、豊麻神社の祭礼（4月）、530運動（5月）、盆踊り（8月）、校区体育大会（9月）、敬老会（9月）校区防災訓練（11月）、慰霊祭（12月）、成人式（1月）等の行事と交通安全、防犯・防災、青少年健全育成、資源回収等の活動を行っている。

また、スポーツ活動では、下地小学校の校庭や体育館を利用し、青少年のみならず地域住民の体力向上、技能の向上を目的としながら協調・思いやりの精神に磨きをかけている自主団体がある。

平成17年度（2005）現在の団体一覧を次表にまとめた。

自主グループ一覧

平成17年度資料		下地小学校	
種目	グループ名	活動日	
1	剣道	若葉剣友会	毎週土 夜
2	インディアカ	下地インディアカ	毎週水 夜
3	ソフトボール	下地チャレンジャー	毎週土 夜
4	サッカー	FCプリランテ	毎週月 夜
5	サッカー	エラン	毎週火 夜
6	ソフトバレー	ブラシーボ	毎週日 午後
7	ソフトバレー	ラビット	毎週日 夜
8	ソフトバレー	ひばりグループ	毎週月 夜
9	ソフトバレー	下地五丁目	毎週金 夜
10	ソフトバレー	下地DCK	毎週木 夜
11	ソフトボール	下地フレンズ	毎週水 夜
12	軟式野球	下地メッツ	毎週土・日 午前
13	バレーボール	バレーボール少年団北部	毎週土・日 午前
14	バレーボール	渡辺ファミリーズ	毎週火 夜

(3) 市民館活動

地区には北部地区市民館（大村町）と下地校区市民館（下地町）があり、多くの人の日頃より文化に親しみながら互いの技量向上に努めている。

① 北部地区市民館

平成16年度現在、27の自主グループが文化伝承と技量向上を目指して活動している。

自主グループ一覧

平成16年度資料		北部地区市民館	
学習種目	グループ名	活動日	
1	カラオケ	北部の会	第1・3 土 午後
2	カラオケ	カラオケ勉強会	毎週土 夜
3	カラオケ	高齢者趣味の会	毎週火 午後
4	カラオケ	唄おう会	第2・4 土 午後
5	カラオケ	水曜会	毎週水 午後
6	日本の歌	愛唱会	第4 火 午前
7	太鼓	葵太鼓	毎週木・金 夜
8	太鼓	葵太鼓	毎週火 夜
9	太鼓	風流太鼓	毎週日 夜
10	体操	健康体操	毎週水 午前
11	体操	健康体操	毎週水 夜
12	体操	ゆったり体操	毎週土 午前
13	体操	ヨガ&導引術	月2回 午後
14	工芸	藤工芸	第1・3 水 午前
15	空手	空手教室	毎週火 夜
16	編み物	編み物・手芸	毎週火 午前・午後
17	習字	実用習字	毎週木 午前
18	毛筆	毛筆のけいこ	毎週金 午前
19	語学	スペイン語	毎週土 午前
20	俳画	俳画教室	第3 金 午後
21	俳句	俳句の会	第1 金 午後
22	短歌	さざなみ短歌会	第2 水 午後
23	絵手紙	絵手紙教室	第3 火 午後
24	生花	生け花教室	毎週金 午前
25	舞踏	日本舞踊	第1・3 水 午後
26	卓球	卓球の集い	毎週木 午後
27	その他	せせらぎ会	第2 火 午前

② 下地校区市民館

平成17年度現在、13の自主グループが活動している。

自主グループ一覧

平成17年度資料		下地校区市民館	
学習種目	グループ名	活動日	
1 剣 詩 舞	剣詩舞くらぶ	毎週月 19:30~	
2 舞 踊	白扇会(舞踊)	毎週月 13:30~	
3 舞 踊	寛多加会(舞踊)	毎週火 19:00~	
4 ダ ン ス	社交ダンス	毎週火 19:30~	
5 体 操	整体体操	毎週水 19:30~	
6 編 み 物	編み物	毎週木 19:00~	
7 新 舞 踊	新舞踊	毎週金 12:30~	
8 囲 碁 将 棋	囲碁・将棋	毎週土 9:30~	
9 大 正 琴	大正琴	毎週土 13:30~	
10 ダ ン ス	ダンスクラブ	毎週土 19:00~	
11 俳 句	草魚俳句会	第2日 12:30~	
12 俳 句	野菊俳句会	第3日 12:30~	
13 そ の 他	しあわせのたね	第1日 14:00~	

毎年11月には“市民館祭り”が開催され、平成17年で15回目になった。



白扇会の皆さんによる練習風景



市民館祭り、作品展示風景(2階)

③ 下地老人福祉センター

平成17年現在、16団体が屋内外の活動を通じて楽しんでいる。

自主グループ一覧

平成17年度資料		下地老人福祉センター	
教室名		開催日	
1	舞 踊	毎週金曜日	
2	詩 吟	第2・4水曜日	
3	俳 画	第2火曜日	
4	民 謡	第1・3水曜日	
5	茶 道	第1・3火曜日	
6	華 道	第2・4水曜日	
7	歌 謡 曲	毎週水曜日	
8	オ セ ロ	第2・4土曜日	
9	囲 碁	毎週木曜日	
10	新 舞 踊	毎週月曜日	
11	バ ン パ ー	第1・3土曜日	
12	ゲ ー ト ボ ー ル	毎日 晴れの日	
13	グ ラ ン ド ゴ ル フ	毎週火・金曜日	
14	大 正 琴	毎週土曜日	
15	ベ タ ン ク	毎日	
16	ラ ー ジ ボ ー ル	毎週火・土曜日	

多くの方々が各サークルに参加し、明るく、楽しく、元気で集う、人に優しい下地校区を育てよう努めている。

(4) 青少年教育活動

青少年の健全なる成長を目的とした青少年教育活動には、地域に根ざした各種団体などの活動が、青少年の成長過程において大きな効果を挙げている。

① 青少年健全育成会

青少年健全育成会では、少子化が深刻化する中において、将来を担う青少年の健全育成を目標として、地域団体(総代会等)との連携協力のもと、校区内パトロールの実施や子どもとのふれあい教室(囲碁・将棋)等、地道な活動を続けている。併せて、保護司会、更生保護女性会などの皆さんによっても社会を明るくする運動を展開している。

② 豊橋少年愛護センター北中校区委員会

委員17名は毎月、下地校区市民館において情報交換をした後、4班に分かれて校区内のスーパー、コンビニ、ゲームセンター及び危険箇所の巡回指導を行い、少年の健全育成に努力している。

③ 下地文庫

下地文庫は昭和58年（1983）に、校区の有志によって寄付された書籍を中心に開設され、子どもたちは身近な図書館として利用している。

中でも、校区の関係資料「郷土誌下地」「とよはしの歴史」「母なる豊川・流れの軌跡」「豊橋市自然環境保全基礎調査報告書」「豊橋市消防50年史」「豊橋の史跡と文化財」等があり、身近に下地を知る格好の場所である。

④ 下地児童クラブ

平成12年（2000）発足、当初は児童4名からのスタートであったが、家庭事情を反映してか、今では20数名の児童を対象に、指導員の方々が「楽しい暮らし」「けじめある生活」を活動の留意点として取り組んでいる。



活動する児童の様子

クラブの活動は月曜日から金曜日は午後0時から午後6時半まで、土曜日は午前8時から午後6時半まで、休日は日曜日と祝祭日及び年末年始となっている。取材の当日も児童の元気な声が聞こえていた。

この事業の実施主体は豊橋市役所児童福祉課である。

⑤ 下地音頭

昭和53年（1978）8月16日下地小学校と下地校区社会福祉協議会は、作曲：佐野量祥、作詞：夏目均、振付：花柳吉房喜、各先生の協力を得て「下地音頭」を発表した。

下地音頭

1. 遠い山から 水を切り出して 流れにのせた
いかだ舟 板ひく音が 町中に響く
下地の町の 下地の町の 木のかおり
2. 団結 努力 誠の力 三つ合わせて成し遂げた
土地改良の 三力橋よ
下地の町の 下地の町の 記念橋
3. 思いで深い 学びの庭に 茂り育った百年の
枝葉の強さ みんなの願い
下地の町の 下地の町の 大いちょう
4. 東の愛生 西の教育 なかをとirimつ 大隊旗
若者たちの 心の支え
下地の町の 下地の町の 赤心社
5. 太子堂では 家康をしのび 芭蕉ゆかりの
松葉塚 心豊かな 三宝の教え
下地の町の 下地の町の 聖眼寺

⑥ 赤心社の活動

赤心社は東部・西部・北部の3社で成り立ち、若い衆、中老、後見と約100名が伝統の花火行事を受け継いでいる。

4月の第1日曜日に「竹もらい」を旧東海道の四ツ屋から吉田大橋まで行き、そこから折り返して豊麻神社まで、小さい子どもたちを交え「よーりゃ、そーりゃ」と掛け声勇ましく練り歩く。第2土曜日には、同神社にて祭礼余興（手筒花火他）を、翌日曜日には金色島にて打上げ花火を奉納している。



赤心社の皆さん

毎年9月の第2土曜日の「炎の祭典」には第1回から参加し、手筒花火21本一斉出しや台物花火（大筒、乱玉）を披露している。第5回には「竹もらい」も披露した。平成10年（1998）8月15日から豊田市稲武町の「稲武まつり」にも参加して、勇壮な地元太鼓と手筒花火・ヨーカン花火で競演をしている。

平成15年から下地小学校の行事「地域の人に学ぶ会」では、5年生にヨーカン花火の作製、ビデオでの手筒花火の解説をし、校庭で実演をしながら伝統文化を紹介している。

(5) 地域の著名人に学ぶ (生誕順)

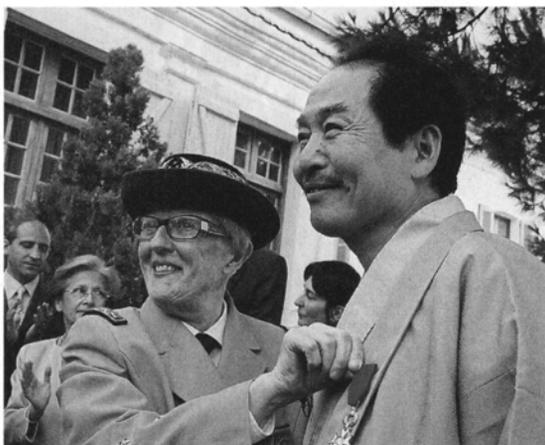
豊橋市制施行100周年を迎えたこの年に、日本はもとより世界で幅広く活躍している校区出身の著名人を紹介する。

① 松井守男

1942年下地町3丁目で生まれる。

1967年武蔵野美術大学造形学部油絵科を卒業し、活動の場を世界に広げ、1972年にはエアフランス、ボーイング747のファーストクラスのデザインを手掛けた。その後もフランスを中心に海外で活躍され、2004年フランスの芸術部門の最高栄誉であるレジオンドヌール賞を受賞された。

松井守男画伯は、NHKの課外授業「ようこそ先輩」(2005.5.4放映)をはじめ、愛知万博のメインゲートへの絵画制作や市制施行100周年記念事業等に積極的に参加され、常日頃より地元の人達との交流を深めている。



将軍様から勲章を授与されている松井さん

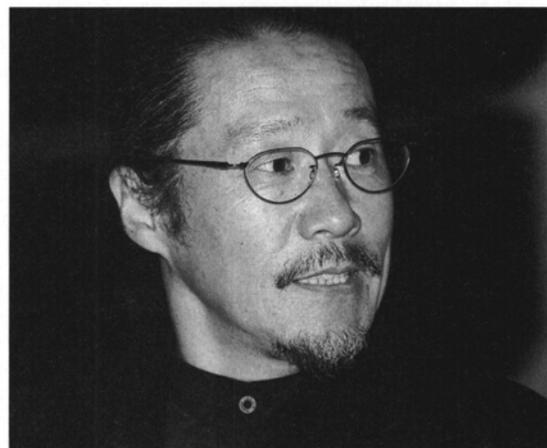
② 喜多郎 (本名：高橋正則)

1953年下地大通6丁目で生まれる。

1978年シンセサイザー組曲“天空”の発表で認められ、1980年にはNHK特集“シルクロード”のテーマ音楽を担当され一躍時の人となった。その後“天空”を全世界で発売、2000年に米国の“グラミー賞”を受賞し、名実ともに世界的な作曲家とシンセサイザー奏者となった。

喜多郎さんは、4月に行われる地元豊麻神社の祭礼には手筒花火の奉納に何回も参加されるほど郷土愛を持っている。

自身のコンサートでも手筒花火を演出し、喜多郎手筒同好会と競演するなど、躍動感あふれる行動は作品にも表れている。



取材に応じている喜多郎さん

③ 米山みどり

1976年下地町3丁目で生まれる。

子どもの頃は地元の若葉剣友会に所属し、厳しい稽古の賜物として小学校5・6年は2年連続で全国優勝など多くの大会で優秀な成績を挙げた。中学時代からゴルフを習い始め、大学生のときアマチュア日本一になった。

1998年には見事プロテストに合格。現在、日本女子プロゴルフ協会会員として全国各地のゴルフツアーに参戦し、大活躍している。



プレー中の米山さん

3 社寺

(1) 氏神様は秋葉様

創建は、天明4年(1784)2月秋葉神社勧請と神社所蔵の棟札にある。明治32年(1899)現在地に移転し、社名を豊麻神社と改めた。

社殿境内地の拡充が進み、昭和15年(1940)11月6日本殿・幣殿・拝殿を改築造営、遷宮祭が盛大に行われた。さらに、昭和18年3月16日本殿透塀が竣工し、ほぼ今日の規模に近く、氏神としての体裁を整えた。



豊麻神社

祭神は、火防ぎの神・火産霊命ほむすびのみことで、遠州春野の秋葉神社を本社としている。昭和20年(1945)6月の戦火にも、まわりは焼失したが社殿・社務所だけは免れた。というより本殿透塀内に多量の焼夷弾が投下されたが、そのすべてが不発であったことに、神徳のありがたさを改めて認識したものである。

祭礼は花火で名高い。これは、宝飯郡下地村と称していた頃、小坂井の菟足神社うたりの氏子として、祭礼に参加し、花火を奉納していた。

今日の竹もらい行事もその頃から引き継がれ、(中断もあったが)出発地もかつては小坂井菟足神社うたりの鳥居先であった。

また境内には、市の巨木名木百選に指定されたメタセコイアの大樹がある。

(2) お多賀様は延命の神様

豊麻神社の境内には、多賀神社・庚申社こうしん・御嶽神社・白菅稲荷神社・弁天神社の五社が

祀られている。

多賀神社は、彦根の多賀大社を本社とし、『お伊勢参らばお多賀へ参れ、お伊勢お多賀の子でござる』と俗謡にあるとおりイザナギ・イザナミの命(伊勢内宮のご祭神アマテラスオオミカミのご両親)をご祭神とする、生命起源の神様で、日本各地で祀られている。

御嶽神社は、木曾の御嶽山を霊場とする山岳信仰の一つ。古く「三宝講」という講社があり、毎年参拝登山をしていた。境内に石碑があり、盛時を知ることができる。



多賀神社

(3) 祭事が行われている神社

① 四ツ屋の水神社(豊川堤防)

市内169社の一社に数えられる宗教法人登録の神社で、天文13年(1544)の棟札がある。下地町6丁目の住民で6月(水神様)と11月(秋葉様)に祭事を営んでいる。

② 5丁目の熊野権現神社(青果市場前)

宝暦4年(1754)の棟札がある。代々鈴木氏を代表として、近隣住民で5月5日に神事を営み、投げ餅の祭事も引き継いでいる。

③ 大通4丁目の牛頭天王社(サガミ西)

補永氏の屋敷内に鎮座し、享保3年(1718)に建立、平成10年(1998)に改築され、立派な社殿になった。7月中旬祇園祭時にお祭りを斎行している。他にも伊勢・秋葉・金比羅社など諸々の神々をも祀ってある。

(4) 芭蕉も立ち寄った聖眼寺

聖霊山聖眼寺は岡崎の満性寺、田原の西光寺とともに三河高田三ヶ寺に数えられた浄土真宗高田派に属する由緒ある寺で、盛時には塔頭も10坊を数えていたという。

清和天皇の時代(858～876)に八名郡の吉祥山麓に開創したと伝えられている。後、鎌倉時代の天福元年(1233)、元下地の聖池に伽藍を建て、慶長9年(1604)、東海道の改修により現在地(下地町3丁目)に移築した。



聖眼寺

徳川家康は西三河の一向一揆を平定し、さらに東三河に進出のため、永禄7年(1564)5月、聖眼寺の太子堂に陣屋をとって吉田城を攻撃した。その後、和議の成立による吉田城開城に協力したことなどで、聖眼寺は幕府や吉田藩から篤く保護されてきた。

昭和20年(1945)6月の戦災で、堂宇・宝物一式を灰燼に帰したが、昭和25年(1950)には本堂が再建された。さらに、昭和8年(1933)創立の下地幼稚園を前身とする三宝保育園(既出)、昭和22年(1947)創立、平成17年(2005)新装改築された三宝社会館などの慈善事業にも戦後、いち早く積極的に取り組んできた。

寺内には、太子堂や六地藏など、歴史を語る建造物がある。特に『松葉塚』(次頁)は、俳聖松尾芭蕉の『笈の小文』の足跡としてもよく知られている。

(5) 真光寺と祐泉寺

ともに聖眼寺の塔頭であった。

真光寺は真光坊と呼ばれて親しまれた。本尊阿弥陀如来像は聖徳太子作と伝えられているが、制作年代・作者は不明である。当寺も昭和20年6月の豊橋空



阿弥陀如来像

襲で全焼したが、住職が尊像を布で包み、猛火をくぐり、身をもってお守りしたという。昭和39年(1964)豊橋市の文化財に指定された。

明治維新後、戸長役場(村役場)が設置され、大正9年(1920)までの50年間、下地の政治の中核として、時には選挙の投票所として活躍したと伝えられている。

当地方では最も早く、文政年間(1818～)にて寺子屋を開設し、郷民教化に当たってきた。明治6年(1873)聖眼寺に豊麻学校が開設されるまで続き、裁縫については昭和初期まで続いていた。

祐泉寺(祐泉坊とも呼ばれていた)は徳川家康の下地合戦の折、永禄7年(1564)5月、家康の手紙を持って吉田城に使者として赴いた恵善法師が開祖といわれている。

江戸末期に寺子屋を開いた霊瑞法師の筆小塚が建てられている。

(6) 専修院

下地の旧家、中西家にかかわりの深い寺院で、創設当時は専修庵と呼ばれていた。昭和28年(1953)専修院と改められた。

(7) 延寿山永福寺

創立は古く、慶長19年(1614)3月、豊川花井寺の末寺として北村の深谷氏が開いた。

幕末には、寺子屋として地域住民の子弟を

教育し、筆子の数も多かったといわれている。
首切り地藏もこの門前にあったという。

(8) 薬師堂

毎年、夏の「額まつり」で知られる。天神の森と共に石田家（豊飯通2丁目）の所有である。

4 史跡

(1) 稲荷せこ と豊川稲荷遥拝所

江戸時代に豊川に架けられていた吉田橋は、今の豊橋より50m程下流にあったようであり、対岸の船町には橋台の跡が残っている。

下地側に「稲荷せこ」と呼ばれる所がある。このあたり一帯は、江戸時代の東海道の整備とともに開けたところである。

街道を往来する旅人や、船を降りた旅人が、吉田橋を渡って下地に入ったとき、まず目にしたところが「稲荷せこ」であった。ここに豊川稲荷を遥かに拝む遥拝所が設けられ、朱塗りの社殿があったが、戦災で焼失した。



稲荷せこと豊川稲荷遥拝所

ここは、豊川稲荷への参道「豊川街道」と、新城へ行く「新城街道」の起点であった。

ここに「右、御油道、左、吉田道」と刻まれた灯籠型道標と鳥居があって、旧東海道を歩く人々の目を楽ませた。これらは、昭和10年（1935）の旧東海道の拡張工事のときに取り払われて、戦後、豊川稲荷の境内に移された。

道標は、平成11年（1999）に現地に戻され

たが、鳥居は「二の鳥居」として現在も使われている。（23頁の写真）

「三河一之宮砥鹿神社 道是ヨリ入二里三十町」と刻まれた砥鹿神社への道標もここにあったが、戦災復興の道路拡張工事時に豊麻神社の社殿右側に移された。



灯籠型道標

「豊川稲荷遥拝所」の石塔は、豊橋市制施行100周年記念で豊川稲荷が建立した。

(2) 松葉塚

聖眼寺の境内に「松葉塚」と呼ばれる石碑がある。句碑は石垣を積んだ亀の上に建てられている。石碑に「こを焼て手拭あふる寒さ哉」という芭蕉の句が刻まれている。「ご」は松葉のことである。また、「芭蕉翁」の三文字が、大きな字で彫ってあるが、これは江戸時代の高僧、白隠禪師の書と言われている。

(3) 忠魂碑

下地の忠魂碑は、豊麻神社の境内にある。宝飯郡下地町（現在の下地・津田・大村）の時代に建立され、3校区から出征して亡くなられた日清戦争以後の戦没者の氏名が刻まれている。各校区に忠魂碑があるが、下地のように神社の境内にあるのは珍しいことである。

(4) 三ツ観音

豊麻神社の裏手に、三面の観音様が安置されている。文政4年（1821）に建てられた。三ツ観音信仰は古くからあって、組内の安全を祈願して祭られた。かつては、下地の盆踊りの晩には、近所の子どもたちが「三観音様に、おロウソクを、あげておくれましょう」と声を出して町内を歩き回っていた。

5 伝説

(1) 下地合戦のこと

戦国時代、下地を舞台にして大きな合戦があった。猛将、松平清康（家康の祖父）が西三河から東三河に侵攻してきたのは享禄2年（1529）5月27日のことである。岡崎から、兵を赤坂、小坂井と進め、先陣は下地に達して火をかけた。その時の吉田城主牧野信成（伝蔵）は、松平清康と決戦するために、豊川を渡って下地に出て、船を流して退路を断ち、背水の陣を構えた。

両軍は下地堤を隔てて対陣した。そのときの様子を大久保彦左衛門は、その著書の、三河物語に、「清康は下地の塘へ押し上げんとし給ふ。信成（伝蔵）も塘へ押し上げんとす。両方、塘の両の腹にしばつきて、半日ばかり、互いの念仏の声ばかりして、大事に思ひて、しんしんと心を静めて居たり」と書き、戦闘直前の緊迫した様子を伝えている。

翌日、清康軍の攻撃で合戦が始まった。はじめは牧野軍が優勢であったが、松平軍の反撃によって、牧野伝蔵・伝次・新蔵の3兄弟は、下地堤で討ち死にした。

牧野3兄弟の墓は水神社の近くにあったが、後年、牧野古白の墓のある竜拈寺に改葬された。現在、「吉田城主牧野一族の塚」が吉田城を対岸に望む下地町神田地内に建っているが、これは奮闘むなしく討死した牧野兄弟と一族の慰霊のために、下地校区総代会が昭和38年（1963）に建てたものである。

(2) 蜂屋半之丞

永禄7年（1564）に、三河一向一揆を鎮めた家康は東三河に進出し、今川方の小笠原備前守が守る吉田城を攻めた。5月14日、小笠原軍は吉田城を出て、下地で戦いが始まった。蜂屋半之丞は家康に仕えた勇士で、鑓の名人

であった。両軍の鑓合わせが始まった時、半之丞は少し出遅れた。

「『半之丞、鑓が始まるぞ。急げ』と言ひければ、蜂屋聞きて、『人が鑓をしたらば、我は切り合ふまでよ。半之丞が二番鑓をしたると云はれてはうれしくもなし』」といて、刀をふるって敵の二人を切り伏せたが、三人目の河合正徳という人の鉄砲で、こめかめを撃たれて死んだ、と三河物語に書かれている。

名誉と勇気を重んじた三河武士の典型として蜂屋半之丞の名は語り伝えられている。



蜂屋半之丞の立ち姿絵図

(3) 首切り地蔵のこと

昔、上伝馬町に仲のよい夫婦がいた。ある日家から火を出して大火事となり、子どもも死んでしまい、不幸が続いた。

妻は日頃から中柴のお地藏様を信心し、毎晩お参りをしていた。妻の心を疑った夫は妻の跡をつけた。夫は妻が拝むお地藏様を浮気の相手と見誤り、地藏もろとも妻を斬ってしまった。大変なことをしたと驚きおそれ、家に帰ると、斬ったはずの妻がいて、妻の話で疑いも晴れた。さて現場に戻ってみると、地藏の首は落ちていた。妻の信心に応じてお地藏様が身代わりになったのだと思い、夫は深く反省した。

この話には、人を疑うことの罪を戒めるとともに、人のために犠牲になる仏の慈悲が説かれている。首切り地蔵は明治になってから、中柴から下地町北村の永福寺に移されたが、戦災にあって破碎され、今はお話だけが残っている。

<資料編>

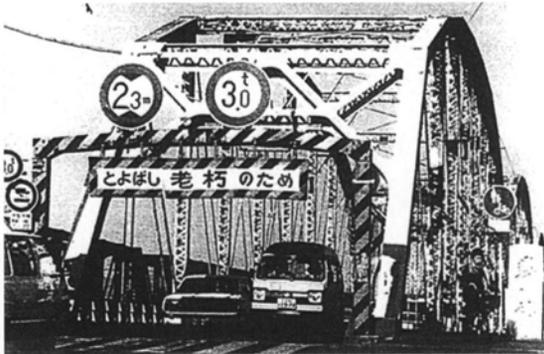
1 下地（町名）の変遷

時代	名称
平安以前	宝飯郡渡津庄下河州
鎌倉	宝飯郡渡津庄下河地
室町	宝飯郡渡津庄下地
江戸	宝飯郡渡津庄下地村
明治24年	宝飯郡下地町
明治39年	宝飯郡下地町大字下地
昭和7年	豊橋市下地町

(渡津庄が外れた時期は不明である)

2 下地町の都市計画

- ・明治時代には、道路の新設・改良についての記録がなく、江戸時代の延長と思われる。
- ・明治45年（1912）に、郡道として「豊川街道」が新設された。（稲荷せこー北村一大賀里）
- ・大正3年（1914）豊橋の架替え工事に着手し、大正5年に鉄骨製アーチ橋が開通した。（1983年まで使用）

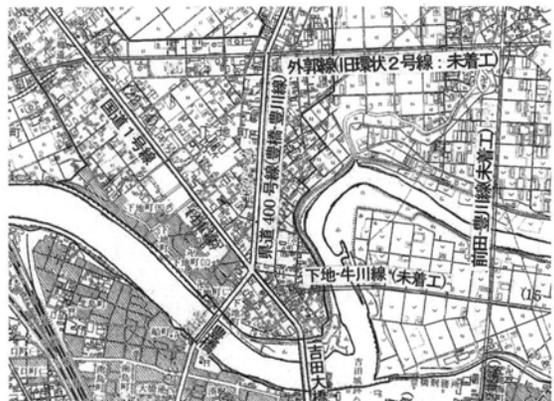


初の鋼鉄製のアーチ橋

- ・大正14年（1925）に、下地町が豊橋市の都市計画区域に編入された。
- ・昭和3年（1928）、豊橋市の都市計画道路が決定し、現在の国道1号線、県道400号線（旧国道151号線）、下地牛川線（未着工）、環状2号線（現名、外郭線：未着工）の主要道路計画が確定した。
- ・昭和15年（1940）、現在の豊川街道（県道400号線）が開通した。この道路は、豊川

海軍工廠への運送量増大に対応と、豊橋からの道路の直線化であった。（道路の舗装は昭和30年頃で、歩道の完成は昭和40年頃）

- ・町内の農道の整備（3 耕地整理を参照）1次耕地整理で、「豊岸-北中前-大村小前」ができた。（天神から北東は県道380号線）
- ・昭和21年（1946）、豊橋市の戦災復興事業計画が作成され、下地町1～5丁目の区画整理と道路の整備が実施された。一連の工事は、昭和33年（1958）に完了した。
- ・昭和34年（1959）に、国道1号線（旧東海道のパイパス）が、西八町交差点から瀬上交差点まで開通した。当初6車線の計画が、4車線となった。（総費用は5億円）
- ・昭和37年（1962）に、国道1号線が瀬上交差点から国府まで開通して現状となった。
- ・豊橋（アーチ橋）の老朽化及び拡幅対応並びに豊川改修事業による豊川の拡幅のため、豊橋の架替えが実施された。昭和55年（1980）に着手し、1期（下流側）2車線が昭和58年に、2期（上流側）2車線が昭和61年（1986）に完成し4車線となった。
- ・平成18年現在、町内の主な道路は、国道1号線、県道400号線（豊橋豊川線、通称豊川街道）、県道496号線（白鳥豊橋線：四ツ屋付近未整備）、県道380号線（豊橋一宮線：未整備）、県道387号線（清須下地線：未整備）がある。



下地町の主要道路と計画（2000年作成）

3 下地町の耕地整理

1期（北部中学校前の道路より南東側）は、昭和7年（1932）に「下地耕地整理組合」を設立して行い、太平洋戦争での中断および戦後の農地改革（1946～50）による小作地解放を経て昭和26年（1951）に工事が完了した。

2期（北西側）は、昭和27年（1952）に「下地土地改良区」を設立して行い、昭和30年に工事が完了した。同時に進行した「江川上流土地改良区」の工事も昭和29年に完了した。



下地町の耕地整理

4 校区総代会及び町内名称と範囲

平成18年4月現在の下地町自治組織である。

《総代会》

[4役] は会長、副会長、会計、庶務
 [諸係、委員] は評議員、土木、社教、子ども会、体育、清掃指導、防犯、交通、婦人部で構成している。

《氏子総代会》

豊麻神社氏子総代会は各町内会から推挙された委員で組織され、豊麻神社宮司および校区総代会と緊密な連携の下に神社の管理、祭礼など執行している。



校区の町内会区分図

町内名称（上：町と組数）と字名（下）一覧

平成18年4月

1	下地町・下地大通1丁目	9
	1丁目 瀬上 緑 宮腰	
2	下地町2丁目	10
	2丁目 瀬上	
3	下地町3丁目	8
	3丁目 宮前	
4	下地町4丁目	12
	4丁目 豊岸 城谷 宮前	
5	下地町5丁目	8
	5丁目 門 豊麻 豊岸	
6	下地町・下地大通6丁目	18
	門 豊麻 重森 橋口 四ツ屋	
7	下地町・下地大通2丁目	12
	神田 宮腰	
8	下地大通・豊飯通3丁目	8
	瀬上 天神 野箱 宮前 横山	
9	下地大通4・5丁目	10
	門 新道 長池 橋口 若宮	
10	下地豊飯通1丁目	16
	神田 横山	
11	下地豊飯通2丁目	15
	北村 天神 野箱 横山	
12	下地豊飯通4丁目	10
	大塚 北村 天神	
13	下地豊飯通5丁目	11
	大塚 操穴 境田 大ノ前の2軒	
14	下地豊飯通6丁目	14
	操穴 五貫 境田 新道 柳目 若宮	

下地校区年表

時代	年号	西暦年	下地町内の出来事	豊橋市・宝飯郡・東三河・(全国)	
縄文	後期	紀元前		大賀里貝塚・五貫森貝塚	
弥生	中期～	紀元前後	緑遺跡(現、下地町1丁目付近)	瓜郷遺跡	
古墳		5世紀～		穂の国(東三河地域)、(645年:大化の改新)	
	白鳳5	686		小坂井の菟足神社創建	
	大宝1	701	現下地町は宝飫(ほお)郡渡津郷に属す	三河国(旧穂の国と三河の国を統合)	
奈良	和銅8	715	三河の国地震(県境付近・M6.7)	(三河の国は、東海道に所属した)	
平安	延暦13	794		(平安京遷都)	
	承和2	835	現下地町は、渡しの通り道であり、当時は「下河洲(後に下河地)」と言われていた	飽海の渡し船(2→4艘へ)後に「志香須賀の渡し」と言われた	
	天安3	859		聖眼寺:この頃吉祥山麓に開創	
	承平5	983	この頃、小坂井付近を通る渡津道が衰え、主に上流の豊川宿を通る道が主流へ	900年代に「志香須賀の渡し」が絶え、以後約300年間渡津駅(小坂井)が衰微した(宝飯郡誌)	
	寛仁4	1020	志香須賀の渡しを通ったとの史実有り		
	元治1	1124		天王宮牛頭天王社(現、吉田神社)創建	
	久寿2	1155	稲荷神社建立 下地開村7人衆の伝承あり		
	鎌倉	建久3	1192		(源頼朝、鎌倉幕府開設)
		正治2	1200	東の宮牛頭天王社建立	
		元久2	1205	西の宮牛頭天王社建立	
天福1		1233	聖眼寺が移転(元下地の聖池付近)		
嘉禎1		1235	聖眼寺が天台宗から浄土真宗に転宗		
仁治3		1242	源親行の「東関紀行」に「近頃よりにわかに渡津の今道という方に、旅人多くかかる」と記録	豊川宿を通っていた鎌倉街道が、下河地を通る道になった	
室町	暦応1	1338		(足利尊氏、室町幕府開設)	
	応永の頃	1400初	「下河地」を「下地」に改名[伝]		
	長祿3	1459	若宮八幡宮を勧請		
	寛正1	1460	後花園院が天満天神社を造営		
	寛正6	1465		今川氏と三河国人と抗争発生[永祿7年頃まで]	
	明応7	1498	明応の大地震 豊川の水脈変更	明応6、7年の洪水で川瀬変更[宝飯郡誌]	
	永正2	1505	下地は今橋(吉田)城主の領地となる	牧野古白・今橋城を築城(今川氏親の命)	
	永正3	1506	[下地が戦場(1回目) 本文参照]	松平長親、今橋城に攻撃(牧野古白・自害):異説有	
	大永2	1522		牧野信成が「今橋」を「吉田」と改名	
	享祿2	1529	下地合戦:松平清康の来襲と牧野氏3兄弟戦死 [下地が戦場(2回目) 本文参照]	松平清康(家康の祖父)が東三河の主要部支配。牧野成敏(松平方)が吉田城主となる	
	天文8	1539	台風で家屋等大部分流出	天文7年、横州村(現、横須賀町)を開発	
	天文13	1544	四ツ屋「水神社」を勧請 祭神:瀬織津比咩命		
	天文16	1547	今川義元の命で領内の検地実施	今川義元が東三河全域を支配	
	永祿3	1560	川路(東郷村・新城市)より川船開通	(桶狭間の戦い/今川義元敗死)	
	永祿5	1562	松平元康(家康)が最初の吉田城攻撃 [下地が戦場(3回目)]		
	永祿6	1563	松平家康 吉田城攻撃 [下地が戦場(4回目)]	松平元康が「家康」と改名 西三河の一向一揆平定	
	永祿7	1564	松平家康 下地村で激しい合戦 下地が戦場(5回目) 本文参照]	松平家康、吉田城開城に成功(永祿8年の説有り) 酒井忠次が吉田城主となる	
	永祿10	1567		大村井水(現、松原用水)の取水口構築	
	元亀1	1570	下地一閼屋間に吉田橋(土橋)が完成	この橋は豊川の最初の橋(酒井忠次の命)	
	安土	天正年中	1573～92	延命山永福禅寺を塞光暮雪が開基 (慶長19年(1614)創立ともいう)	
天正3		1575		長篠の戦い 横州村を横須賀村に改名	
天正5		1577	白山権現社を勧請(小嶋家)		
天正17		1589	洪水で吉田橋(土橋)が流出	東三河の検地を実施 豊川大洪水	
桃山	天正18	1590	豊臣秀吉が小田原攻めの時、吉田(豊)川の洪水で下地に2～3日間足止めしたと記録が有り 下地-船町間に吉田橋を移設(板橋)	(豊臣秀吉が全国統一) 池田輝政が吉田城主になり、船町を命名 また、吉田橋の移設と霞堤の構築を命令	
	天正19	1591		大村井水(現、松原用水)完成	
	慶長2	1597	聖眼寺を移設(東海道の北5～6町の地)		
江戸	慶長9	1604	聖眼寺を再移設(現在地へ・3回目の移転) 下地に一里塚設置。東海道の松並木を植樹	(1603年 徳川家康、江戸幕府開設)	
	慶長12	1607	聖眼寺太子堂を再建(渡津庄下地郷(村))		
	寛永6	1629	聖眼寺本堂を再建(旧寺を壊し大寺を建設)	横須賀村字四ツ屋が発足(4軒)	

時代	年号	西暦年	下地町内の出来事	豊橋市・宝飯郡・東三河・(全国)
	寛永7	1630	東の宮牛頭天王社を吉田城主松平主殿・造営	
	寛文10	1670	船町と下地村で船番組の紛争が発生	
	延宝8	1680	洪水で大橋被害・大修理。稲荷社の大松樹倒れ	豊川大洪水/1682年清須付近の豊川本流変更
	貞享2	1685	聖眼寺太子堂を再建	吉田城主小笠原孝岐守
	貞享4	1687	松尾芭蕉が聖眼寺で俳句を詠む(本文参照)	
	元禄5	1692		大村井水(現松原用水)完成
	元禄7	1694	これ以前より下地は、菟足神社の氏子として菟足神社で手筒花火等を奉納	
	宝永4	1707	宝永の大地震 吉田橋が崩壊	吉田城本丸御殿が倒壊
	正徳4	1714	太子堂修復、修復中に3回洪水	豊川大洪水
	享保17	1732	聖眼寺薬師堂焼失・再建	吉田橋の13回目の橋着請が起工
	元文3	1738	水神社創建(吉田城主松平豊後守の命令)三本松牧野氏塚の東に建設(明治6年廃却)	現在、水神碑は豊飯通4丁目集会所に仮安置
	寛延2	1749	下地村差出帳を新吉田城主へ提出(本文参照)	
	宝暦2	1752		吉田藩校「時習館」創設
	宝暦4	1754	熊野権現神社を勧請	
	宝暦11	1761	聖眼寺本堂上棟	1756年から始まった松原用水の紛争が解決
	宝暦12	1762	下地村で大火(22軒焼失)	
	明和1	1764	秋葉社勧請(豊麻神社の前身)	
	明和6	1769	芭蕉の句碑「松葉塚」を建立(本文参照)	
	寛政4	1792	下地は氏子として風祭の「竹かつぎ」参加	菟足神社の風祭に「竹かつぎ」の記録有り
	文化3	1806	山本貞農「吉田名蹤録」を著述(本文参照) 下地金魚花火の記述	
	文政4	1821	山本貞農没 城ヶ谷津の三ツ観音建立	
	文政5	1822	この頃、真光寺に寺子屋を開設	岡崎の菅生川で「金魚花火」を初奉納と記録
	文政12	1829	専修庵建立 吉田橋大修理	
	天保4	1833	安藤広重:東海道53次の絵(下地の遠景を描写 本文参照)	
	安政1	1854	地震で吉田橋・堤防大被害 下地で倒壊47軒	安政の大地震(1日おいて2回発生)
	安政2	1855	水神堤(現在の北村付近)が決壊(90m位)	豊川大洪水
	文久2	1862	四ツ屋の茶屋で下地の若衆と二川宿役人と紛争 下地村163戸	豊川大洪水
	慶応2	1866	吉田城主の奥様、下地の花火を観覧(吉田藩日記に記録)	牟呂村に「ええじゃないか」騒動が発生
	慶応3	1867	助郷騒動、下地に波及	
	慶応4	1868	吉田藩が聖眼寺に郷同心を集め洋式訓練を実施	(大政奉還)
明治	明治1	1868	吉田橋・仮橋で架け替え	(明治天皇・東京へ行幸 神仏分離令)
	2	1869	吉田橋・新橋で架け替え	(東京遷都) 「吉田」を「豊橋」と改名 「吉田天王社」を「吉田神社」と改名
	初期		船着場設置許可 戸長役場設置(真光寺)	
	6	1873	聖眼寺に「豊麻学校」設立	
	8	1875		豊川の霞堤を大改修
	9	1876	「豊麻学校」を「下地学校」と改名	
	11	1878	吉田橋一部流失 掛け継ぎ工事 明治天皇が行幸の途中に聖眼寺で休息	宝飯郡役所を設立 大村と大賀里村が合併し大村 横須賀村と藪下新田が合併し津田村
	12	1879	吉田橋の架替え 豊橋(とよばし)と命名	
	15	1882	下地学校を現在地へ新築移転	
	17	1884	愛生社(下地東部)と教育社(下地西部)の活動 (本文参照)	歩兵第18連隊を吉田城趾に設置
	20	1887	「尋常小学下地学校」と改名 御油警察署 下地巡查駐在所を設立(昭和7年まで下地・大村・津田を管内)	蚕糸周旋商店を札木町に創立
	21	1888		東海道線豊橋駅完成 (市町村制公布)
	22	1889	台風の大雨で、下地と大村で堤防が決壊	大村と長瀬村が合併し大村 津田村・瓜郷村・下五井村・清須新田が合併し鹿菅村 (明治憲法公布)
	23	1890	下地は「宝飯郡第1の商業地なり」(宝飯郡誌) 下地村:412戸、1,520人	第1回総選挙、第1回帝国議会開催 府県制・郡制公布
	24	1891	「下地村」を「下地町」に改名(10月16日) 町内を4小区画とし、慣称を「元下地・城貝津・西下地・東下地」とした 下地郵便局開設	宝飯郡で町制の採用は、下地町、牛久保町、蒲郡町の3町だけ 豊橋に共同生糸荷造所開業(濃尾地震)
	26	1893	濃尾地震で大損害の吉田橋を架け替え	三河国宝飯郡誌刊行(早川彦右衛門著)

時代	年号	西暦年	下地町内の出来事	豊橋市・宝飯郡・東三河・(全国)	
	27	1894	鹿菅村の「四ツ屋」「重森の一部」「東前の一部」を下地町に編入	豊橋電燈(株)設立 (日清戦争:1894~1895年)	
	28	1895	「愛生社」と「教育社」が合体して「赤心社」となる	豊橋尋常中学時習館開校	
	29	1896	下地町に公設消防組設置		
	30	1897		豊川鉄道(現.飯田線)豊橋-豊川間開通	
	32	1899	字豊麻の秋葉神社を改名し現在の「豊麻神社」の地に移転 祭神:火産靈命、祭日:9月16日(本文参照)		
	36	1903	大塚(北部市民館下流)付近で堤防決壊 低地では屋根や2階の庇まで浸水	豊川大洪水 (日露戦争:1904~1905年)	
	39	1906	大村(現大村校区)・鹿菅村(現津田校区)を合併し、旧下地町(豊橋市へ合併前の状態)が発足	豊橋町、花田村、豊岡村が合併し、「豊橋市」が誕生[8月1日]	
			大字で下地・大・長瀬・津田・瓜郷・下五井・清須新田	(神社合祀令)	
	41	1908	明治29~39年に玉糸・生糸の取扱業者が町内に10社以上設立され生糸の町を担った		
	42	1909	下地町に火力発電所を建設	第15師団司令部開庁	
44	1911	下地町の製材所は6社、清酒製造2社など			
大正	大正 1	大塚(北部市民館下流)付近で堤防決壊	豊川大洪水 行明と下地で堤防決壊		
		下地・大賀里間の郡道開通(稲荷せこ・北村) 大字下地(現.下地町)は、525戸、2,652人			
		豊川改修運動が始まった 豊橋(とよばし)架け替え工事に着手	(第1次世界大戦)		
		豊橋(とよばし)が竣工(前のアーチ橋)			
		富山県に端を発した米騒動が下地にも波及			
		町内の火災で19軒焼失			
		豊麻神社境内に「忠魂碑」を建立 旧下地町(現.下地・大村・津田)の戦没者を合祀	10年4月 郡制廃止		
		旧下地町が豊橋市の都市計画区域に編入	豊橋市、都市計画区域を策定 現. JR 飯田線の地下駅開業		
		大正12年の郡制廃止に伴う郡役所廃止	町村議会に初めて普通選挙が実施 台風で津田小学校校舎倒壊(死者18名)		
		昭和 (戦前)	昭和 2	豊橋の上水道工事着手 世界金融恐慌発生	豊橋の上水道完成 渡津橋完成
旧下地町を含め豊橋市の都市計画道路決定	渡津橋の工事に着手				
旧下地町が合併希望を豊橋市へ提出 この頃、下地の所得税や国税は宝飯郡一[郡誌]	昭和初期、愛知県の町村で、租税力のある町として半田町、下地町、津島町など記録				
下地町にも、市内と同時に上水道が通水	豊橋の上水道完成 渡津橋完成				
豊橋市に合併(9月1日)、旧下地町の「大字下地」を「豊橋市下地町」に改名 豊麻神社、造営に着手 下地小学校校歌制定 下地耕地整理組合設立	豊橋市が下地町、牟呂吉田村、高師村、下川村、石巻村多米地区を合併 下水道工事に着手 市立病院開院 人口:全国で18位				
下地幼稚園(現. 三宝保育園)開設	豊橋市の都市計画第1期事業認可				
豊麻神社の地鎮祭・起工式	公設消防組新編成				
緑遺跡発見(下地町1丁目付近)					
瓜郷遺跡発見 市の下水道竣工(2.26事件)					
第2次世界大戦が始まった					
豊川街道開通(現. 県道400号線) 豊麻神社社殿完成、遷宮祭実施	町内会を告示				
太平洋戦争が始まる(12月8日)					
東南海地震で町内に被害	東南海地震発生(12月)				
三河地震で町内に被害 6月20日未明の空襲で町内でも多数焼失	三河地震発生(1月) 豊橋空襲(6月) 太平洋戦争終わる(8月)				
昭和 (戦後)	昭和 21			戦災復興計画が旧東海道沿い地区に適用 下地小学校の校舎1棟(7教室)完成	戦災復興都市計画事業開始
				豊橋市立北部中学校開校 豊橋消防団第8方面隊 下地分団発足 下地町の手筒花火等復活	(日本国憲法公布) 引火花火(下地で開発)最後の奉納
				下地農協設立	
		昭和25~28年、赤心社が祇園の花火に参加	豊川用水の工事着工 豊橋まつり開始		
		下地耕地整理組合工事完了(南東側半分) 下地小学校校歌制定(現行)	小学校の完全給食開始		
		下地土地改良区設立 翌年工事着手(北西側半分)			
		台風13号で下地小学校の校舎1棟倒壊(9月25日・昭和21年完成の校舎)	台風13号の被害甚大 特に、三河湾沿いの海岸堤防が多数箇所決壊(テレビ放送開始)		

時代	年号	西暦年	下地町内の出来事	豊橋市・宝飯郡・東三河・(全国)
	29	1954	下地小学校2階建校舎完成(3月) 江川上流土地改良区工事完了	豊橋産業文化大博覧会開催
	30	1955	下地土地改良区工事完了(3月)	農業「パラチオン」の使用が急増し生態系に影響
	31	1956	現、下地町1丁目の児童公園開設	
	32	1957	下地の三味場(焼場)廃止(現、児童公園)	
	33	1958	下地に最初の防犯灯設置	豊橋市防犯協会10周年
	34	1959	伊勢湾台風(15号)による被害多(9月26日) 吉田大橋及び取付道路完成 下地小学校3階建て鉄筋コンクリート校舎一期完成 下地小学校の水泳プール完成	東海地方は、台風15号の被害甚大 豊川放水路の工事着工 消防法改正(危険物管理強化)
	35	1960	この頃、手筒火花中断(羽田祭りでの死亡事故、 火薬取締法強化など)1~2年で復活	新訂・三河の国宝飯郡誌(復刻版)発行
	37	1962	瀬上交差点より西側の国道1号線完成	国道1号線改良完成(3月・国府迄)、集中豪雨
	39	1964	三味場(焼場)跡の児童公園完成	東海道新幹線開通(10月1日)
	40	1965	上水道の下地給水所供用開始	豊川放水路完成
	41	1966	大村霞堤防閉鎖・堤防の改良完成 界雷豪雨による 浸水(10/12) 町内会の区画全面見直し(7区→13町内)	豪雨で市内浸水被害多 朝倉川で死者不明9名
	43	1968		豊川用水全面開通
	44	1969	竜巻が町内を通過、死者1(関屋町→大村町、 本文参照)	東名高速道路開通
	46	1971	中央青果卸売市場が下地へ移転 下地町の豊川狭 さく部の用地改修着手 台風23号による浸水被害	台風23号、東海地区に上陸(8月31日)
	47	1972	下地農協等が合併して西部農協 豊川改修工事に着工	豊川流域下水道事業に着手
	48	1973	北部老人福祉センター完成 下地土地改良区工事完了 下地小学校創立百年記念誌発行	(第1次石油危機)
	49	1974	七夕豪雨(7/7)、下地・津田で床上浸水27戸 下地雨水ポンプ場設置計画	
	50	1975	第1回530運動を実施	豊橋市の530運動・全市域で実施
	53	1976		下条橋完成
	54	1979	豊橋市北部地区市民館開館 豊川流域下水道事業着手(梅藪・前芝・下地)	
	55	1980	豊橋(とよばし)の架け替え工事着手	豊川流域下水道一部供用開始
	57	1982	下地も台風による浸水被害発生	台風18号三河地方に襲来
	58	1983	下地地区の下水道一部供用開始 豊橋の架替え片側竣工、下地校区市民館開館	
	59	1984,5	雨水排水ポンプ3機設置	
	61	1986	豊橋(とよばし)の架替え・4車線化竣工(3月) 郷土誌「下地」発行	
	62	1987	下地町豊岸の護岸完成	
平成	平成 1	1989	「竹もらい」行事子供会で実施	
	5	1993	「竹もらい」行事、完全復活(本文参照)	平成6年、竜巻が大村町を通過し被害多 (阪神・淡路大震災)
	7	1995		
	11	1999	米山みどりさん、女子プロゴルフで初優勝	平成8年、炎の祭典開始(赤心社も参加)
	12	2000	喜多郎氏、音楽で米国のグラミー賞受賞	
	13	2001	祭礼用のぼり竿・大筒台・乱玉台、放火で焼失 雨水排水用暗渠(内径2or3m)完成	
	14	2002		上渡津橋完成
	16	2004	画家松井守男氏、フランスのレジオンドヌール賞 を受賞	浜名湖花博覧会(4~10月)
	17	2005	雨水排水用「下地ポンプ場」供用開始 小学校で NHKの「課外授業・ようこそ先輩」を全国放送	万国博覧会「愛・地球博」(3~9月)
	18	2006	下地校区史編纂 豊川稲荷遙拝所の石塔建立 下地町制施行115周年(10月16日)	豊橋市制施行100周年(8月1日)

補注1) 明治以前の主な吉田橋架け替え：1641, 1668, 1752, 1768, 1793, 1845, 1858

参 考 文 献

三河国吉田名蹤綜録	豊橋市	志香須賀雑考	津田校区総代会
豊橋市史	豊橋市	三河地震60年の真実	中日新聞社
とよはしの歴史	豊橋市	下地小学校創立百年記念誌	豊橋市立下地小学校
郷土豊橋を築いた先覚者たち	豊橋市教育委員会	郷土誌 下地	豊橋市立下地小学校
豊川流域の生活と環境	愛知大学総合郷土研究所	北部中学校創立25周年記念誌	豊橋市立北部中学校
東三河の戦国時代	「東三河の戦国時代」刊行会	東三河の歴史（上巻、下巻）	郷土出版社
東三河産業功勞者傳	豊橋市立商業學校編	聖眼寺史	聖眼寺
東三河の経済と社会		東三河の歴史	東三高校日本史研究会
第1輯～第6輯	愛知大学地方産業研究所	吉田城と歴代城主	豊橋市美術博物館
天竜川・豊川流域文化圏から		吉田城と城下町	豊橋市美術博物館
東・西日本をみる	愛知大学総合郷土研究所	ふるさとの思い出 写真集 豊橋	国書刊行会
豊橋の史跡と文化財	豊橋市教育委員会	母なる豊川・流れの軌跡	
豊橋めぐり	東三文化会	（豊川改修60周年記念）	建設省豊橋工事事務所
豊橋市水道五十年史	豊橋市水道局	戦国に生きた牧野一族	豊川地域文化広場・ふるさと資料館
豊橋市消防五十年史	豊橋市消防本部		（順不同、敬称略）

編 集 後 記

校区史は郷土史でも、下地誌でもなく、もちろん郷土偉人伝でもありません。市制施行100年を祝賀する“記念史”です。

市制施行100年の歴史を越える校区の歩みを述べることは簡単ではなく、制限、制約も多く意を尽くすことはできなかったことをお詫びします。

また、編集に当たって校区総代会、赤心社、消防下地分団、市役所各部局、校区市民館、北部地区市民館、校区の皆様のご協力、ご指導ご助言に厚く御礼申し上げます。

編集委員一同

下地校区史編集実行委員

委員長

鈴木昌一郎

副委員長

水越 國夫

杉井 政雄

大石 省一

委員

中村 勝美

鈴木 三芳

夏目知恵子

松井 啓晏

川合 克也

大村 稔

山本 和正

中尾 勝美

竹本 行雄

富安 崇弘

中村 靖彦

倉光 成郎

大久保正仁

石黒 洋征

サポーター

杉浦 章五

前田 隆男

校区のあゆみ 下地

平成18年12月25日発行

編 集 下地校区総代会

下地校区史編集委員会

発 行 豊橋市総代会

印 刷 株式会社 きょうせい

R2100

古紙配合率100%再生紙を使用しています



Trademark of American Soybean Association



2006年
市制100周年
100th Anniversary Toyohashi City

つながり ひろがる 未来 豊橋